

（このあたりは靈ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を期す

ふるむと 風

第132号 (2017年5月)

風に吹かれて（110）

白井啓治

させる」とが学校教育ではない。人間にとって最も重要な時期である思春期に、受験のための勉強は必要ない。

：（略）：

当風の会の集まりで、よく話すことであるが、自分の思いを表現する文章に「上手下手などのくだらない尺度を当てるな」と。

尺度することを義務付けられた小中高の学校教師達のいう上手下手を鵜呑みにするな、と話ををする。表現がまどろっこしいと言つて下手な文章とはいえない。そこに自分の真実の思いがあるかないかが問題である、と。言葉の本質が、それを

発する人間全体の世界を背負つて いるといふのは
實に言葉の意眞実を伝えたものだと改めて吾身に
問うものである。

「忖度」なる言葉が走り回つたが、走り回つていい
る「忖度」の言葉には美しさや真実はない。卑猥
な姑息さしか見えてこない。これはその言葉を使

人の心などと言つるのは、果てしなく広がる宇宙と同じだと言えよう。宇宙に対抗しうるのは人の心だけだ。生命をもつ肉体で宇宙を測ろうとして測れるものではない。例えば、3億光年などという距離は、紙面の数学上には存在するが、現実の肉体には知る術のない数値である。

今年も子蜥蜴達が出てくる季節になつたが、今年はその数が少ない。庭石に小鳥たちの餌場を作り小鳥寄せをしているので、もしかしたら産まれたばかりの子蜥蜴達が小鳥たちの餌食になつたの

かも知れない。手乗りの蜥蜴を思つていたのに。

ラム「折々のうた」を夢中して読んだことを思い出す。

よくぞ生き残った人類の祖先 菅原茂美

人類の祖先は、これという生來の武器も持たずには、よくぞ猛獸だらけのあのアフリカで、しっかりと生き残つてくれたと、今更ながら感心する。

角もなし、鉤爪（かぎうめ）もなし、牙（は）もなし。

勿論、毒針もなければ蹴爪（けげづめ）もなし。されば三十六計逃げるに如かず……と、速い脚があるわけでもない。ならば、頭突きでも食らわせようにも、こんな薄い頭蓋骨では、こっちが先に砕ける。

人類の祖先は700万年前、アフリカの大地で、大型類人猿を共通祖先として、チンパンジーから分岐した。DNAの違いは1.4%以内なので、チンパンジーとボノボ^{※1}と人類は分類学上、3種

【^{※1}】ボノボ・ピグミーチン・パンジーとも呼ばれた。本来の生息地はアフリカ赤道直下の熱帯雨林。今のコンゴ共和国に大雨が続き、チンパンジーの生息域が、川で真っ二つに割れた。以降、両群は川で遮られ、交流は閉ざされた。少数群はボノボとして、本来のチンパンジーより小型。現在の雄33cm、3.9kg。雌76cm、31kg。対面正常位で性交をする。

雜食性で父系社会。メスの子供は成長すると他の群れへ移る。もし群れ同士が縄張り境界線で衝突しそうになると、互いにメスを差し出し、相手のボスを慰め戦いは起らない。戦争ばかりしている人類も、ぜひ見習いたい高等な「サル智慧」である。

飼育下のボノボは、非常に知能が優れ、英単語

100種ぐらい理解できる。マツチで火をつけ、焚き火で物を焼いて食べ、特殊なキー・ボードで、人と対話ができる。哺乳期間は4年。1歳で初産。寿命40歳。】

さて、大型類人猿の性格は、オランウータン、ゴリラ、ボノボは、きわめて温厚であるが、どういうわけかチンパンジーと人類だけは、仲間同士で殺し合いをする獰猛性がある。チンパンジーの雄の子供は、しばしば親などにより殺され、食べられる。

そして、人類の最大の欠点は、絶える事のない「戦争依存症?」。人類史を顧みて、戦争のなかつた時代を見つけるのは、至難の業である。

さて我らの先祖は、気候変動で樹木が急に減少し、やむなく樹上生活から、地上に降りざるを得なかつた。最初は勿論四足歩行であり、そのうち、前足の片方に子供やエサを抱えたりして三足歩行となり、ついに直立二足歩行（700万年前）をする。

人類が類人猿と枝分かれした当時の身長は85cm。体重5.5kg。脳容積400ml。足らず（現在は1450ml）。地上に降りたサルは、正に無防備。周りは、ライオン、ヒョウ、チーター、ハイエナなど肉食獸だらけ。絶好の餌食であつただろう。それをいかにして生き残つたか、真に不思議である。

普通、動物の防備・攻撃の道具といえば、まず「角」であろう。角は頭部の固い突起物。牛、羊、鹿などは、骨質であり、犀は外皮が変化した角質。草食獸なるが故、肉食獸に対して戦う強力な武器である。

を与えてくれなかつた。ただし人類には、善しろ悪にしろ、想像上の怪物として人面の「鬼」があり、角もあれば、牙もある。

「角」に関して余談。今、北海道の知床半島などで、エゾシカが増え過ぎ65万頭に達した。毎年14万頭ほど淘汰しているが、増え過ぎは止まらない。一時は絶滅の危機に瀕したが、自然に回復した。天敵はヒグマのみだが、数を調整する役には立っていない。問題は毎年雄鹿の角が4～5月に落する。その「落角」が列車事故、自動車事故、

耕運機事故などを引き起こし大問題。更に人身事故のほか、林業被害や、2011年の農業被害額は64億円。

こんなアホな現象が起きた原因は明治新政府にあつた。内地の次三男対策として北海道に多数入植。米を作ろうにも寒くてろくに獲れない。やむなく畜産を奨励。すると一部でエゾオオカミに家畜が襲われる。明治政府は懸賞金を出して、徹底的に狼狩りを行つた。1900年、エゾオオカミはついに絶滅（内地のニホンオオカミは1905年、ジスター・駆除により絶滅）。人類も自然の一部に過ぎない。他の種を滅ぼす権利など絶対にありはしない。日本は農耕民族であった。昔の農民は自然の理を弁える知性を持っていた。農地を荒らすウサギ、イノシシ、鹿など草食獸を退治してくれる「狼」を、「大神」として神社に祀り感謝の念を示した。今でも狼を守り本尊とする神社は全国で17社も存在する。これに反し西洋のイソップ物語などを直訳し、狼を悪者扱いした日本文化の浅ましさに腹が立つ。人に飼われ、腑抜けになり下がつた犬に対し、孤高を貫く狼の生きざまに私は心からスベクト。人は人口過剰なのに、食糧があらうが

なからうが、むやみやたら子造りをするが、狼はエサが少なければ、子造くりをしない「自律性」を持つている。

現在、草食獣による農作物被害は、「食物連鎖」という自然の掟を、欲の深い人類が近視眼的に破つた過去に対する罰と言える。今になつてエゾシカの異常繁殖に悩み、シベリヤやカナダから狼の再導入を図つたが、諸々の問題を解決できず、計画は、ご破算。人間の目先の利益追求のため、自然を破壊し、大計を逸した典型例といえる。

*

さて次は「鉤爪」である。肉食獣ではないナマケモノでさえ、立派な鉤爪をもつてゐる。敏捷な行動や天敵に遭遇した際、攻防に鉤爪は必需品。靈長類は、樹上生活しているにもかかわらず、なぜか「扁爪（ひらづめ＝平爪）」である。細い枝は指でつかむとして、太い幹は、爪が鉤状でなければ、体重を支え切れまい。アフリカで最も腹を空かしているのはライオンともいわれる。百獸の王とも呼ばれるライオンでさえ、狩りの成功率はわずか5%。あんな立派な鉤爪を持ち、牙を持っていても、なかなか狩りは簡単には成功しないものらしい。

雑食性である人類の祖先は、時により、敏捷な小動物も捉えてエサとしてきた。なのに平爪でも、よくもネズミやトカゲなどを捉えられたものと、しみじみ感心する。人類史700万年の中、前期6割くらいは、ろくな石器も持たない素手同様の時代である。大脳が発達し、やつと道具らしい道具を用い、意図して火を使うようになつたのは、ごく最近（ほぼ40万年前）。大脳は時間と並行して拡大したものではなく、近年になつて急拡大したもので

ある。

*

さて次は「牙（きば）」である。角や鉤爪がないのなら、せめて牙ぐらい、しつかりした攻防の道具があつてよさそななものである。人類で牙に相当するのは犬歯。糸切り歯ともいう。勿論人類に犬歯はあるが、あつという間に縮小し、門歯や臼歯と大差ない大きさに退化してしまつた。

とにかく人類という動物は、闘争のための生來の武器は、ほとんどなし。なのに大型哺乳類中の最大のボビュレーション（人口）を誇る存在となつた。

牙で最も大きいのは「象牙」であろう。最大1本3.5kgとか。象の牙は犬歯ではなく、門歯である。雌雄ともに存在。象は2属3種であるが、マンモスにも大きな象牙が存在した。現在象の数は減少気味で、1989年、ワシントン条約で絶滅危惧種のため、象牙の取引は禁止された。（ただし日本は条約以前に入手した象牙の市場は許可されている）。

日本では古来より象牙は印鑑、根付、印籠、三味線のバチ、煙草のパイプ、茶入れと蓋、掛け軸の玉など用途は多様。西洋では、ピアノの白鍵、ビリヤードの玉、彫刻素材など重用されてきた。このように洋の東西を問わず需要は非常に大きい。現在では中国の需要（世界の70%）が大きいため、密猟が甚だしい。2013年、中国の習近平の随行員が、タンザニアで外交官による「外交封印袋」を利用し、大量の象牙密輸が発覚したばかり（ネット情報）。

現在、象は保護も行き渡り毎年8%ずつ自然増。しかし密猟頭数は12%といわれ、総数減少に歯止め

めがかかるない。全世界の象全体の象牙を収穫したとしても、需要の6分の1にしかならない。ネットで調べても全世界の象の頭数は、載っていない。

い。

*

さて、人類が生き残った大きな原因は、旺盛な繁殖率と言える。同じ靈長類の中でもヒトは高い方。そうなつた理由について科学者の推論は、ヒトのメスは排卵期を表現しない。いつでも交尾OK。妊娠中でさえ雄を許す。更にその理由については、群れのメスは、多くのエサを持ち帰る能力の高いオスを留め置き、他のメスに奪われないよう、いつでもそのオスの性的要求を満たしてやる習慣が、常態となつた。勿論、ヒトもチンパンジーと同様、多夫多妻の乱婚型ではあつたが、強いメスの独占欲が深ければ、自ずと一夫一婦制に移行する。法律で一夫一妻制が制度化したのは、日本では明治新政府になつてからである。

なお余談であるが、軒下の燕の夫婦と6羽の子供のDNAを調べた科学者がいる。結果は何と子供のうち2羽のみが夫の子で、他は夫の巣守りの間に妻はスーイスイと舞い、間男の子。フリリッピンなどで越冬のため往復何千kmも飛翔するのだから、子供は多様性が必要で、その子らが来年戻る確率は非常に低い。それを計算の上で浮気なのか？

それゆえ人妻様よ！人類生残のため、もし3人の子供を持つなら、せめて一人は夫以外の子を持ちなさい。そうすれば兄貴は草野球選手でも弟はイチローになるかも…。稀勢の里やノーベル賞の可能性も。しかし断つておくが、遺伝は、せいぜい10%ぐらい。後は想像を絶する「努力」が必要。

*

さて、角も鉤爪も牙もないなら、せめて感覚器官だけでも、異常に発達していたかというと、全くそうではない。他の動物に比べたら、むしろヒトの五官は極めて鈍い方である。

まず視角だが近眼や乱視を抱え、よくぞ生き延びてきた。哺乳類は恐竜から進化した当時、夜行性であったので、色覚は、いわばどうでもよく、色盲が多い。従つて情報収集は、音や臭いに頼つたが、他の動物に比し、人類はそれさえも鈍重であつた。

聽覚だつて加齢と共に急降下。高周波(特にコウ)

モリは敏感・低周波象はヒトには聞こえず、狭い範囲の中間波長しか聞き取れない。インドネシアで大地震・大津波があつた時、対岸のスリランカの象は、足から伝わってくる低周波音を、骨格を通じて耳で感じ取り、早々に高い山に逃げ、津波を逃れた話は、動物行動学会の話題となつた。象に比べたら人間の無能さには、ガックリ。

ヒトの味覚も大した事はない。あくあおいしかった…と満足していたのに、後で毒キノコの中毒となり、酷い時にはビンビンコロリ。スイセンの葉（毒成分リコリン）を、ニラや浅葱（あさつき）と間違えたり、加熱不十分の食中毒はザラにある。動物は口に入れても、ヤバイ物はすぐ吐き出す。

フグも猛毒。知ったかぶりしてフグ毒について云えば、フグそのものには毒はない。フグが食べたプランクトンに猛毒がある。それゆえ人工エサで養殖すれば、フグ毒の心配はない。海のない栃木県で今、フグを養殖。ただし『養殖の安全フグ』の看板は掲げられない。なぜならば、天然との区別にトラブルが生じる恐れがあるからである。

次は嗅覚。臭覚ともいう。犬や豚は鋭い嗅覚の

た

持ち主であるが、ヒトは哀れなほど感覚が鈍い。夜行性動物では最も重要な情報収集器官である。陸上の動物は、揮発性物質が嗅覚器の感覚細胞にある受容体に接することにより、匂いを感知する。水中動物は、水中の臭いの分子を、嗅ぎ取る能力がある。

ヒトでは347種類の臭いの受容体が確認されているが、マウスでは1000種も存在する。天敵だらけの野生時代、人はこんなにも貧弱な感覚器官で、よくぞ生き抜いたと、これまた感心する事、

では34種類の臭いの受容体が確認され、マウスでは1000種も存在する。天敵だらけの野生時代、人はこんなにも貧弱な感覚器官で、よくぞ生き抜いたと、これまた感心する事、大なり。

なお、フェロモンは雌雄の情報交換などに使われる重要な物質であるが、それを感知する器官は「鋤鼻器」（じよびき＝ヤコボソノ器官）と言い、爬虫類では口の中に（ヘビやトカゲが頻繁に舌を出し入れするのはフェロモンの分子を感知するため）、哺乳類では鼻の入り口に存在する。人では鋤鼻器は胎生期に退化。さて、巷の話。旦那が白粉の移り香のまま帰宅

さて、巷の話。旦那が白粉の移り香のまま帰宅しても、鼻の鈍つた奥様は、遅くまで夜勤^レ、苦勞様^レと低調に出迎える。真に平和な事例。不倫を分かつていながらの演出なら奥様は大物。亭主は、ありふれた雑魚^(ザコ)に過ぎない。ところが私の妻は、嗅覚が鋭かつたので、若い時、私は浮気など、到底できない悲しき運命であった。しようがないから、夢で夜な夜な、ネオン街をうろつき廻る。公務員は真に辛いもの^レ。昼も夜も、誠実一

そして五官の最後は触覚。弱い地震など、トン
ト感知できない。キジは本震の前のP波を感じし
いつも「ケン・ケン」と騒ぐ。私は子供の頃、そ
れを聞いて地震が来ることを事前に知る事ができ

ヒトは逃げるにしろ足も遅い。現在、男性世界の100メートルランナーでも時速36km。鈍そうな象でさえ、時速40kmである。水中のペンギンも時速40km。

以上人類に備わっていてもよさそうな生來の武器を挙げたが、他に毒針・毒牙など護身用の道具があつてよさそうだが、そんなものは人類には存在しない。ただし「毒舌」はある。例えば「サソリの毒は後で効くのヨ・♪」と美川憲一が歌い、新聞の川柳に「薔薇に似て妻は色褪せ棘殘る」。女性の口に毒がある裏には、男性に不誠実があるから?…

さて、それだけ無防備な人類が、どうやつて生き延びられたか？ その2大原因を述べたい。

第一は体毛を失った事。樹上からサヴァンナに降りた我らの先祖は、白い皮膚に黒毛であった。ところが木陰が少なく強力な日照は、皮膚のDN Aを破壊する。そこで黒毛を捨て皮膚をメラニン色素で黒くし、UVカット。毛が少なくなれば、

水分の多いエクリン腺が発達。長距離を走つても
気化熱で体温上昇を防げる。動物は瞬発力こそあ
るが、長距離走には体温上昇のため弱い。大きな
獲物の肉を楽々入手できた。それが大脑と体格の
增大を招いた。

第二の原因は、矢状稜（じょうりょう）の消失。300万年ほど前に生息した我々の先祖アウストラロピ。

テクス・ロブストスは矢状稜という骨がカツチリ頭頂部に存在し、下顎からの咬筋と結びついていた。徐々に食べる物が柔らかくなると、頑丈な咬筋は不要となる。当然、矢状稜は不要となり消失。そのおかげで頭頂部の重しが取れると、大脳は大発展。石器など道具が進歩し、言語発達や社会組織が強固になる。それが擬態や保護色もなく、攻撃・防衛の生來の武器がなくとも、ご先祖が生き延びられた重大な要因と考えられる。人類は色々な器官が《退化》したおかげで《進化》を遂げた。

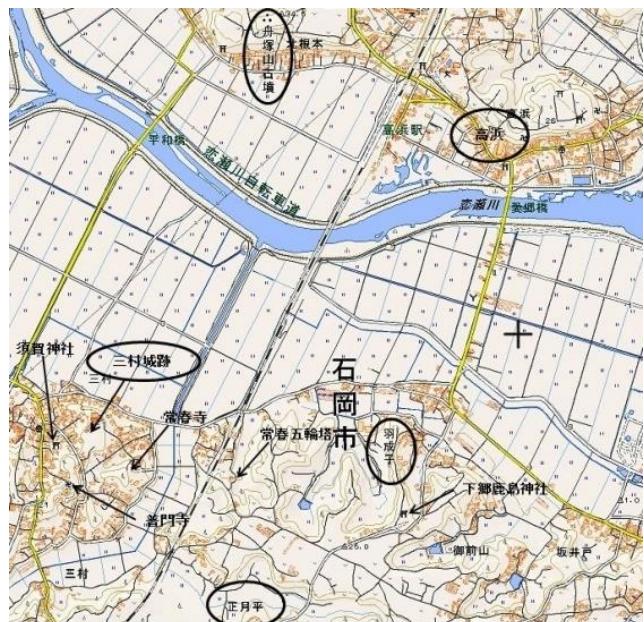
【追記】以上「イジカル面から生き延びた要因を述べたが、紙幅の関係で述べられなかつたメンタル面での生残要因が多数あると思う。それについては、続きを読むとして、別掲「風の呴き」で詳述する。】

地域に眠る埋もれた歴史（26）木村進

世紀半ば

石岡の高浜の対岸である三村地区は昭和28年に高浜町が石岡に統合された翌年の昭和29年に

②この地の山の上(現三村小学校)に天正年間(1573~1592)の初期に府中を守る大掾慶幹が南の小田氏防衛のために三村城を築城し、次男の常



2、
正月平

まず、地図の一番南にある「正月平」からです。

三村は府中（石岡）の高浜とは恋瀬川をはさんで反対側（南側）にあります。

春を城主としたが、小田氏や小川の園部氏との争いの中、城は陥落し、若き25歳の常春は逃げ延びる途中自害して果て、これが府中大掾氏の滅亡につながっているということ。（16世紀後半）

地図にはこれから説明する正月平、三村城跡、常春寺、普門寺、須賀神社、鹿島神社などの位置関係を示しました。しかし、私がこの地区に抱くイメージは次の2つです。

①平安時代後期の前九年の役と呼ばれる、源頼義と（八幡太郎）義家の親子が奥州に安部氏討伐に向かつた途中にこの地を通つただろうこと。（11

戦い終わって都に帰った親子から感謝の気持ちを込めて「黄金のはだし」が贈られたと石岡市史などには書かれています。そして地名もそれにあやかつてめでたい「正月平」となりました。

もちろんこれがどこまで真実かはよくわかりません。各地に鎌倉時代などにいろいろな伝説が作られました。では「黄金のはたし」とは何でしょうか？ 正確に書かれた記事を見かけません。ただ

この「ハタシ」といわれるものはこの部落より霞ヶ浦先端にある歩崎観音へ寄進されたといわれています。この歩崎観音では本尊の觀音様と共に、長い間33年に一度のご開帳が踏襲され、この「はたし」も眠つたままでした。しかし、数年前より8月の歩崎祭りの期間中に毎年開帳されるようになりました。しかし「黄金のはたし」はありません。昔あつたといわれているのは竜女が安産祈願で無事子どもが生まれて寄進したと伝わる「黄金のはたおり機」でした。係りの方にお話を聞いてみると、この「はたおり機」はそれほど大きなものではなく、昭和の初期頃? 東京に展示で持ち出してから帰つてきていないで行方不明だそうです。この竜女の「黄金のはたおり機」がそのときの「黄金のはたし」のことなのでしょうか。記録も定かではありません。源頼義親子たちの軍勢はここから常陸国府(府中・石岡)にこの恋瀬川を馬で渡りました。しかし沼のようにぬかるんでいて馬は足を取られて前に進めません。そこで川岸に生えていた茅などを刈り取つてたくさんぬかるみに敷き詰めて川を渡ることができたといわれています。

その話から「茅堤」と言う地名が残され、これが訛つてかいづみ(地元では「かえづみ」と発音)となつたと言われています。古東海道の跡をおいかけてこのような話に遭遇すると、このあたりで昔は川を渡つたのかもしれないとい話に耳を傾けてしまいます。この正月平地区を散策してみました。場所は三村の少し南側の高台で、かなり高低差で

入り組んでいます。でも大きな屏の家が多いですね。地区のはずれの山に八幡神社がありました。

3、三村城址

三村城址は小高い丘の上にあり、現在は三村小学校が建つています。ここは16世紀に大掾慶幹の次男常春(つねはる)が城主となつて、府中城(長男貞国が継いだ)の南の小田氏の進入を防ぐために築かれました。しかし、小田氏との攻防は激しく、ついに1573年に落城し、常春は25歳の短い運命を閉じました。現在の三村小学校の校庭から回りを見渡してみると、かなり急な坂が回りを囲つており、敵の侵入を防ぐには適していたと思われますが、逆に敵に囲まれやすく、孤立しやすかつたものと考えられます。常春の墓(五輪塔)はこの山を下りた常春寺から数百メートル東の田んぼの線路脇にあります。事件から450年もの年月が経っていますが、往時の面影がまだ残つているのは不思議な感じです。翌年の1574年には小田氏も佐竹軍により土浦城が陥落しました。三村城が何年間あつたものは定かではありません。城ができる前には砦があつたようです。しかし城としの機能はわずか数年の短い期間であつたものと思われます。しかし、まわりの地域には「城の内」「城構内」「御城」などといった地名もまだ残っています。

三村の地は、石岡(府中)側とは霞ヶ浦の浅瀬をはさんだ先にあり、周りには小田氏の土地が多い状態でした。

4、常春寺

常春寺(じょうしゅんじ)は三村城の城主常春(つねはる)公が1571年頃に創建されたとされる。場所は三村城址(現三村小学校)の入口の東側のふもとにひつそりと建つていて、その数年後の1573年には常春は小田氏の攻撃で城は落城し25歳で戦死している。この三村城は大掾氏の南側の防衛のための築城であつたと見られるが、数年しか保てなかつた常春公の思いが残されているように感



三村常春(つねはる)の五輪塔と椿の木

じる寺である。山門は1751・64(宝曆期)に建てられたものとのこと。

常春寺の本堂は1682年(天和2年)に建立されたという。常春寺は、三村城主平常春の開基(1548年~1573年)密雙永周の開山と伝えられる。曹洞宗万隆山常春寺が正式名である。同寺には、常春の位牌「萬隆院却外常春禪門」をはじめ、常春使用と伝えられる軍配団扇などが残されている。なお「常春」は位牌に「常春禪門」と見えることから、俗名ではなく法号と考えられる。

(石岡の歴史 石岡市史編さん委員会編より)

この寺に伝説として伝わる三村城の落城秘話などを見ると、どの程度地元に愛されたかは今では思い回ることもできないが、昔がふつと昨日のようにみがえつてくるから不思議である。常春が自害したとされる場所は、寺の前の田んぼのあぜ道をまっすぐ東に進み、少し登つて常磐線の橋を超えてすぐその先を右に下った麓にあります。

5、普門寺

府中(常陸)大掾氏の支城「三村城」は、まるで敵の中に城を築いたかのように出城に思える。

この城の主「常春(つねはる)」が興した曹洞宗万隆山常春寺が城跡の東の麓にあるが、城の西側の少し高台には「普門寺」という真言宗豊山派の寺がある。正式名称は醫王山吉祥院普門寺という。

この寺の創建は永禄2年(1559)に源海法師により開基されたといわれている。1559年といえどまだ小田氏の支配下とはなっていないはずだ。

なにしろこのあたりで「普門寺」といえば、つくば市北条にある「普門寺」を思い浮かべる。この北条の普門寺は小田氏の勢力下にあつた寺で、1374(応安7)年に、小田孝朝が小田城の守りとして定めた小田領4ヶ寺(普門寺、大聖寺、法泉寺、南円寺)の一つといわれた大きな寺であった。またこちらの三村の普門寺も4カ寺のひとつである「南円寺」(かすみがうら市)の末寺であったという。室町の頃には(つくば市)普門寺は僧兵五百、(かすみがうら市)南円寺は僧兵三百もいたというのでかなり大きな規模の寺であったようだ。

その末寺なので当然小田氏との関係が強く感じるが、創建当時はどんな関係があつたのだろうか。

本堂入り口に「三光松」と石碑があつたが、いきさつはわからない。つくばの三光院普門寺から持ってきたものなのかもしれない。

6、須賀神社

夏祭りが盛んな三村の須賀神社へ行つてみた。

須賀神社や素鷦神社は明治時代の廃仏毀釈で神仏分離というよりは仏を壊せという命令によりそれまでの天王社などインドの牛頭天王(ごずてんおう)を祀っていたところがスサノオなどを祀る神社になつた。

この神社も昔から祇園祭がさかんに行われていた。

いまも毎年7月に神輿が出て、夜になると神社に戻らうとする神輿を上から何度も押し返して、壯絶な争いが行われる。

7、(下宮)鹿島神社

高浜から愛郷橋を渡つて進み、突き当たり脇の道を左方向に曲がり、すぐにまた右に曲がつた、



高浜からほぼまつすぐ進んだ位置にこの鹿島神社はある。大同2年(807)創建と伝えられる。

た同じ時期に香取神社と息栖神社も近くに祭られたというが、今はなく、明治になつてからこの鹿島神社に合祀されたようだ。現地には何もかかれたものは置かれていない。神社名も記されていない。しかし、この神社の近くに「羽成子」という地名があり前から気になつていて、羽成子はなしと読むようですが、「羽梨」に通じる。延喜式に書かれた常陸国式内社(茨城郡3座)に「羽梨山神社」があり、平安時代の三代実録には羽梨神が書かれている。これは現在一般には、笠間市(笠間)の羽梨山神社とされています。しかし、天文15年(1546)の園部状の記述に、小田氏が羽梨之宮に集結して海を渡つて小川の園部氏を攻めたと書かれているといい、この羽梨之宮はこの「羽成子」という名前と地形が一致します。

かもしだらこの鹿島神社が延喜式の式内社なかもしれません。

ニッポン音楽の話⑨

日本音楽の進む道

木下明男

今から50年前、労音と言ふ音楽運動に身を投じた頃のお話です。

品川区の大企業に入社した頃、60年安保で団結力を身につけた労働者は、職場の隅々まで明るく諸要求を実現できる職場になつ

ていました。諸々のサークル活動が盛んで、私も其の頃、先輩から誘われ労音の活動に…。

組合弱体化のため、新賃金制度(会社職制の強化)導入が計られ、組合の分裂策動が行われました。会社側の組合分裂策動により、人間関係や様々な愛憎を経験した私は、社会のあり方に興味を持ち始めました。そんな折り、サークルの代表として、労音の地域活動に参加するようになりました。北海道函館労音との交流会に参加したのもこの頃で、生涯をかけて音楽運動に参加するきっかけにもなりました。

そして、何のために音楽運動を進めるのか勉強が始まります！そんな時に学んだテキストから…。

・音楽も法則によつて発展する

人間の社会は、生産方法の発展を基礎に、原始共産体から、奴隸制度・封建制度・資本主義制度と発展し、更に社会主義社会から、共産主義社会へ発展しようとしている。どんな国家もどんな民族も、むろん其々の特殊性は持つてゐるが、しかし、この歴史法則の外に出る事は出来ない。人類の文化は全て、この其々の文化を反映したもので、同じ歴史法則に基づいて発展してきた。

だから音楽も、原始共産体の音楽から、奴隸制度の音楽、封建制度・資本主義制度の音楽と、その社会の本質を反映した音楽が、次々に発展してきました。そして、新しく社会主義社会の音楽が生まれ、更に共産主義社会への音楽へ進もうとしています。

これは人類社会の音楽発展の歴史法則に基づくもので、どの国の音楽も、どの民族の音楽も、例えどんなに大きな特色を持つても、この法則の外に出る事はありません。それは、どんな人間も精神や体質の特色を持ちながら、幼年から少年、少年から青年、青年から壮年へと発展する歴史法

則の外に出る事が出来ないのと同じです。

しかし、実際の音楽を取り上げてみると、この法則の通り現れていないように見える部分が沢山ある。それは次の二つの原因によるものです。

1、其々の社会音楽は、必ずその前の社会のシップを残しており、必ずその次の社会の音楽の芽を育んでいる。

2、民族的特色が、其々の音楽に非常に大きな特色を持たせている。

第一の点は、例えば資本主義音楽は、何處の国の場合でも、必ずその前の封建音楽の要素を相当残しながら、やがて次の社会主義音楽の要素を底に持つようになっています。人類の歴史は、其々の革命期に、政治革命、経済革命、文化革命の順に発展してきましたが、文化革命は長い時間を必要とする本質を持っています。そこで、文化そのものが、一方では前の社会の遅れた要素を残す、極めて保守的な条件を持ちながら、一方ではその社会の底に、進んでいる次の社会への政治革命や経済革命の要素を敏感に反映する、革命的な条件も持っています。つまり、文化というものはその社会の本質を正しく反映しながら、同時に、その社会からも立ち遅れる点と、次の社会へ突き進んでいく点と、両方を持っています。此處に、文化の発展のために文化運動の絶対に必要な条件があります。つまり、その文化運動をどの階級が指導するかという事の重大性があり、文化における階級闘争の基礎があります。今の日本の色々な民族音楽に対する正しくない評価から生まれた混乱です。これまでヨーロッパの資本主義音楽を絶対的なものと

考え、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸民族の音楽などは、全て劣等なもので、滅ぼしても人類は何の損失を受けないもののような考え方があります。これらは、帝国主義の侵略性を基礎とした、資本家階級の見方に基づくものです。これに反対して、全ての民族音楽は、其々独特的の特徴を持っています。それを成長させ交流させることを通じて、初めて人類の音楽が大きく高まり、豊かになるものだという考え方があるようになりました。これが今までの民族の独立と自主的な発展を主張し、そのために奮闘している、労働者階級の見方です。ここにも、音楽運動の基礎としての階級闘争の要素がはつきり現れています。

・ 今の日本音楽の特色

今の日本音楽の第一の特色は、アメリカ帝国主義に半ば占領されている資本主義の音楽として、資本家階級の指導する、退廃的な植民地主義の音楽が圧倒的だという事です。そして、それが日本人民の民族的自覚と階級的自覚を眠り込ませる重要な役割をしています。

第二の特色は、前の社会の封建的な要素が大きく残っている事です。民謡その他に見られるような、地方的なセクト性、また、クラシック、軽音楽、邦楽などと音楽愛好者が別れ別れになつて、階層によるセクト性、そこから、家元制度のような最も古めかしい制度までそのまま残っています。これらは、みな封建的なセクト性が日本音楽の民族的統一を妨げている現れです。

同時に、第三の特色は、これらと全く反対の、次の社会の音楽に進む基礎をちゃんと備えている

事です。独立・平和・民主・中立・生活向上の日本から社会主義日本に進む、民族の進路をはつきり見定め、そういう立場に立つ音楽運動の組織を作り出しております。労音・うたごえ・わらび座など、これら音楽運動の組織は、そういう共通の目標を持っており、それが今の日本音楽に与えている影響は計り知れぬものがあります。

前の二つは、資本家階級の指導から生まれた特色、後の一つは、労働者階級の指導が生み出した特色です。このように、二つの階級の指導が、今までの日本音楽のなかで、真っ向から対立し争っています。日本音楽の運命はその戦いの結果に掛かっております。いつまでも、退廃的な植民地主義音楽の泥沼に溺れていて、「国籍のない音楽」の汚名を受け続けるか?それとも、独特の迫力と香気を十分に發揮する民族音楽として統一して、世界人類の音楽を豊かにし高める方向へ進むか?日米安保条約という鎖で日本民族をいつまでもアメリカ帝国主義に縛り付けておこうとしている、資本家階級、その忌まわしい鎖を断ち切つて、外国への従属から日本民族を解放しようと努力している、労働者階級、その二つの階級の指導が、音楽の上では、こういう形で戦っています。日本の大多数の勤労者がそのどちらを支持するか、解り切つたことではないでしょうか?

・ 労働者階級はかならず勝利する

いま、ソビエト・中国をはじめとして、世界人口の二分の一を超える十億以上の人民が既に、社会主義社会を建設しています。そこには、もう一人の資本家もおりません。資本主義は基本的に滅びています。五十年前、地球上にはただ一つの

社会主義国もありませんでした。第一次世界大戦で、二億の人口をもつロシアが社会主義になり、第二次世界大戦で、中国その他が社会主義になりました。いま、第三次に大いに発展させており、そういう作品を作り出しております。労音・うたごえ・わらび座など、これら音楽運動の組織は、そういう共通の目標を持っており、それが今の日本音楽に与えている影響は計り知れぬものがあります。

前回の二つは、資本家階級の指導から生まれた特色、後の一つは、労働者階級の指導が生み出した特色です。このように、二つの階級の指導が、今までの日本音楽のなかで、真っ向から対立し争っています。日本音楽の運命はその戦いの結果に掛かっております。いつまでも、退廃的な植民地主義音楽の泥沼に溺れていて、「国籍のない音楽」の汚名を受け続けるか?それとも、独特の迫力と香気を十分に發揮する民族音楽として統一して、世界人類の音楽を豊かにし高める方向へ進むか?日米安保条約という鎖で日本民族をいつまでもアメリカ帝国主義に縛り付けておこうとしている、資本家階級、その忌まわしい鎖を断ち切つて、外国への従属から日本民族を解放しようと努力している、労働者階級、その二つの階級の指導が、音楽の上では、こういう形で戦っています。日本の大多数の勤労者がそのどちらを支持するか、解り切つたことはないでしようか?

まず、戦争の危機が迫ったと言つて、戦争は決して自然天然に起きたものではありません。誰かが起こすから、起きるのです。では、誰が起こすのでしょうか?解り切つています。帝国主義者資本家階級以外に起こす者はありません。資本主義といふものは、その内部に持つ本質的な矛盾から、危機の襲つてくるのを避ける事は出来ません。その危機を解決するために、帝国主義者は、第一次・第二次世界大戦を起こして、全世界の人民を戦争に巻き込み、数千万の人間を殺しました。しかし、世界戦争は、帝国主義の矛盾を解決しなかつただけなく、逆にその最も恐れる社会主義を生み出します。第二次世界大戦の後、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの諸民族が、一齊に帝国主義の支配を跳ね除ける民族独立の運動に立ち上がりました。これはこの50年の間に私たちの目の前に埋もれた歴史の現実で、そしてその中に、ちゃんと歴史の法則が示されています。

第二次世界大戦の後、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの諸民族が、一齊に帝国主義の支配を跳ね除ける民族独立の運動に立ち上りました。既に80ヶ国以上が独立し、その戦いは益々大きくなっています。

広がっています。それがアメリカを中心とする帝国主義の新しい危機を生み出した直接の原因です。うして、全世界の勤労人民が、世界の悪と苦しみの根である帝国主義を包囲して、しかも、日に日本は苦し紛れに、植民地支配の最も重要な根拠地である東南アジアに戦争の火を点けざるを得なくなりました。第三次世界大戦を起こせるにしろ、益々強まる世界人民の包囲の前に、帝国主義はやがてこの地上から姿を消さなければならない運命を持つている事は明らかです。労働者階級は、まさしく勝利の道を歩いています。

音楽に対する労働者階級の指導の勝利の上にのみ築かれます。音楽における階級闘争は階級闘争の全体のその一部であるからです。労働者階級が勝利の大道を歩いている事は、労働者階級の指導する音楽運動も、また、勝利の大道を歩いている、何よりの証拠です。だからこそ、それらの音楽運動は、日本でこれまで、このように発展してきました。全世界の人民の力、民族の力、それは日に日に強くなり、日に日に帝国主義を窮地に追い込んでいます。日本の場合も同じです。日本の労働者階級の力は、日に日に強くなり、米・日反動勢力を日に日に窮地に追い込んでいます。日本人民の民族的自覚と階級的自覚は日に日に強まりつります。労働者階級の立場に立つ日本の一切の音楽運動は、こういう背景のもとで生まれ、こういう条件の下で成長してきました。そして、日本人民の民族的自覚を高める、大きな役割をしました。これらの音楽運動は、これから、益々雄大な人民の歌、清新な民族の歌を作り出して、全く新

しい魅力で日本人民を引きつけ、人類全体の音楽に大きな貢献をするに違いありません。そうして、益々勝利の大道を広げていくでしょう。（おわり）

帰つてきてからの父 伊東弓子

一年前の五月、父の第三の故郷へと出かけた。山は高いのか、畑や田は、家は、人の暮らしは、と思いを馳せての旅立ちだった。十日後帰つて来た時は、連れて来た筈の父はなく淋しさでいっぱいだったが、父の遂げられなかつた思いを三人で果たした中で、父は、母島で戦友と確り生きていった姿、平和を願う気持ちでいたことを子供たちに伝えた。もう一度行つてみたい思いも湧いてきた。夏は、秋は、冬はどんな様子だろう、と欲が大きくなつていつた。もう一度行けるだろうか。

二十年八月終戦、その年の暮、父は帰つて來た。一年半ぶりの故郷が父の目にどう映つたろう。疲れきつた体と心を休める間もなく動き出さざるを得なかつたろう。寺は農地解放で作つていた人に渡された。小作の人達の出入りもなくなつたか、世話人さん達が心配して何やかやと知恵を絞つてくれたらしい。母の着物や帯が食料に変わつたのもこの頃だ。井戸端の先の藁屋の物置に伯母夫婦が住むことになつた。藁が沢山積まれていて格好の遊び場だつた。かくれんぼの時、私は柱と柱に足を掛け高い所でじつとしていた。妹、弟、従兄弟は下の方で搜している。突然伯母の声。

「女の股の下なんか潜るもんじやない。 ゆみ子 もその恰好は何だ」

と叱られたが楽しいひととき。その伯母達も南側の山際に家が出来てそこへ移つた。その後、藁屋の物置は壊された。本堂の一角に越していした伯父の家族五人は、山門の斜め前に家が建つて新しい生活が始まつた。父や母の苦勞も知らず「猿蟹合戦」の話しの猿の家みたいだと遊びに行つた。杉皮の屋根、土壁、土間には流し、その傍に水甕があつた。板の間には囲炉裏があり、庭の井戸には孟宗竹の根つこの重みで上げ下げする釣瓶だつた。床は高くて伯父の働く姿が見えた。柿や栗の木も切つて畑になつた。栗の粒揃いを小川まで売りに行つた木もなくなつた。雷電山参道添いの杉の樹は伐採されて家を建てる材木になり、山の上の高い松の木も売られて、鳥の住居もなくなつた。物置が庫裏の北側、大きな枇杷の木の傍に出来た。冬になるとわらが沢山積まれ、その中に納豆つっこが眠つていると父は言う。朝起きしてつれてきたぞと大粒の納豆をもつてきた。物置の西側に属に（二本橋）という便所があつた。枇杷の実が黄色くなると物置の屋根に登つて取る。眺めもいいし、美味しかつた。その中に隣りに鶏小屋が出来た。卵は小川へ売りに行つたり、卵屋が買いに来つた。減多に口には入らない。年老いた鶏が偶に潰される時は、（なむまいだー、なむまいだー）と何十回も父は唱えていた。庫裏の北側にあつた風呂場は井戸端に、より近い東側に変わつた。ポンプの口から孟宗竹を半分に割つた桶が、五右衛門風呂の風呂桶に水を注ぐように作られた。その下を潜つて人が出入りしていたのも懐かしい。父は新しい時代の生活に必要な物を作り、道を開いていったのだろう。そこには世話人さん、親しい仲間の手助けがあつたと思う。父の努力に母も応え

て農閑期の間、農家の娘さんたちに和才を教えることになって、冬は若いお姉さん達の賑わいがあった。お姉さん達は茶摘み時には、山門添いにある沢山の茶葉を摘みに来てくれていた。

百姓坊さまと呼ばれた祖父が育てた果実や畑や山から沢山の恵みを頂いたと、母は感謝していた。父は口にこそ出さなかつたが、寺を守る為、家族を養う為に使わせて貰つたと、先代の苦労を偲んでいたことがある。八人の家族の食糧づくり、人との付き合いのことを思つて畑を耕した。小柄な体で万能を振り上げ下し、腰を曲げて鍬で畠を作つていった。私も草取りなど手伝つたが、「猫より増しだ」と笑つておばさんがいた。庫裏の前の広い畑は麦、さつまいも、じやがいもが主に作られた。野菜類も色彩豊富に出来た。太陽の光を充分に吸い込んだトマトの味、キャンディー代わりにかじつた胡瓜の味が忘れられない。

「井戸の下」という地名の荒地を開墾していく父をみていた。西陽が一寸あたる位で日中の陽射しは期待出来ない所だったが、何日もかけて畑が出来た。姉弟でお茶をもつていくのは、もう一つの楽しみがあるからだった。

山際に小さな池があつた。(どんぐりころころ)の歌が想像できて、落葉をひっくり返してどじょうを搜した遊び場の一つだつた。父の作った畑の下に細長い水溜りがあった。その先に新道がある。「夕方まで畑をしている杖をついた村長さまが帰られる」「この頃は自転車で帰られるんだ」と父が話してくれた。間もなくあの池もある水溜りも田になつて苗植え、稻刈りをする父の姿みた。井戸の下の畑に、じやがいもが育つたが小さかつた。母は「貧しくても心は豊かにね」と心づかいや

物を生かして使うことの話しをし、作つてもくれた。コップに水を入れて「水オルガンとよんで、歌をうたつた楽しさもその一つ。父が帰つてきてから産まれた妹が、百日位で亡くなつた。栄養が足りなかつたのね、と母は言つた。父は幼い弟が泣くと、「泣くな、兄妹が四人も死んだんだ。三人は力を合わせて生きていくんだ。亡くなつた兄妹の分まで命をだいじにするんだ」と。姉弟喧嘩をする」と、

「仲良くしろ。日本は戦争に負けたんだ。残つた者が仲良くしないでどうする」

「沢山の人がこの戦争で死んだんだぞ。生きている人はどう生きいくか、確り考えるんだ」と言つた。その時は、厳しい口調だけが心に残つていたが、成長すると共に、言わんとしていることがわかつってきた。

やがて父は役場での仕事をすることになった。その中で新しい時代の空気を感じ、新しい出発をしたことだろう。母もPTAに、民生委員に婦人会へと地域の人との輪の中で新しい時代を学んでいったことだろう。

戦地での父の苦痛や戦後の父母の苦労を乗り越えられたのは、何の力だろう。祖父、母の存在があると思う。祖父母の中興の苦労も、それ以前からの人々が脈々と生きて作りあげてきたもののいだきものだと思う。「戦争を起こすためではない」と強く感じた。父からも「戦争はするな」と強く伝えられた。

平常の中では自分を捨てていたよう思ふ。心の奥に仕舞い込んだものが時々出て来るのに気がついた。今一度母島へ行つてみたい、亡くなつた戦友のいる海を思いながら「あこがれのハワイ航路」を歌い、戦争の話しを私たち三人にしてくれた。結婚してからも、主人や子供と酒を飲み交わし食事をしながら、伝えてくれた。戦地から帰つて、ただ食べんが為に働いてきた。丈夫な体があつたからやつてこられた。後は見坊(弟の名)に任せた。やつてくれと言つていた。

村の変ぼうを感じながら、歩道橋の上で背負つた孫に夕陽を見せながら、この子がもう少し大きくなつたら「母島に行くぞ」と、思つていたに違いない。その思いは叶わず七十二歳で亡くなつた。暮れから正月にかけて韓国へ行つてきた。韓国での最後の日、プサンまで連れて行つてくれた。朝六時に出たが、半日がかりの夕方陽が落ちる寸前にプサンに着いた。大きな船が沢山ある。戦前、父や母が平壌に行く時、帰る時乗り降りした所だ。私も一度ここから行つてみたい、と思つた。プサンにくる途中、竹を見た。何ヶ所もあつたが、みな日本人が戦前植えたものだと娘から聞いた。若かった父と母が生活していた平壌や、その先の村に行くことは出来なくとも、この道を辿つてみよう。次の日、ソウルまで送つてくれた娘家族は三十八度線附近まで行つてみると、見て来てねと見送つて別れた。

た孫に夕陽を見せながら、この子がもう少し大きくなつたら「母島に行くぞ」と、思つていたに違いない。その思いは叶わず七十二歳で亡くなつた。暮れから正月にかけて韓国へ行つてきた。韓国での最後の日、プサンまで連れて行つてくれた。朝六時に出たが、半日がかりの夕方陽が落ちる寸前にプサンに着いた。大きな船が沢山ある。戦前、父や母が平壌に行く時、帰る時乗り降りした所だ。私も一度ここから行つてみたい、と思つた。プサンにくる途中、竹を見た。何ヶ所もあつたが、みな日本人が戦前植えたものだと娘から聞いた。若かった父と母が生活していた平壌や、その先の村に行くことは出来なくとも、この道を辿つてみよう。次の日、ソウルまで送つてくれた娘家族は三十八度線附近まで行つてみると、見て来てねと見送つて別れた。

恩師との再会

小林幸枝

三月の末、霞ヶ浦聾学校で、三十五年ぶりに恩師と再会しました。

中学時代にバレーボールの指導を受け、関東地区聾学校の大会で三位入賞を果たした。以来、私は

県指定文化財（22）

兼平智恵子

タローの一日は、午前は毎朝校門の周辺で子供達を迎える。それから何故か一年生のクラスを訪問、三クラスあつたので順に見て回り、八時三十分を過ぎると必ず駅へ向う、午後からは三時三十分にて去る四月一五日（土）、よ（四）い（二）、こ（五）の日には「みんなのタロー ブロンズ像」

新石岡駅は西口駅前広場の五月末、完成に向けて工事が進んでいます。この完成真近い駅前広場にて去る四月一五日（土）、よ（四）い（二）、こ（五）の日には「みんなのタロー ブロンズ像」

忠犬タロー顕彰会の皆様そして御尽力なさった皆様、タローと触れ合った市民の皆さんのが切なる思いが叶えられました。

おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。ご連絡頂きましたのに晴れの除幕式に参加する事が出来ず残念でなりませんでした。

石岡駅で主人と離ればなれになり、石岡市立東小学校へ迷い込み、タローと名づけられ、学校犬として毎朝と夕二回、二キロの道のりを十七年間も通い続け、主人を待ち続けたという犬と人間との美しい物語です。

この他、殺処分として保健所に捕虜されたところを用務員さんと娘さんの救出劇、「極度にうれしいと、犬も涙を流す」ということをこのとき知りました」と用務員の杉本さん、タローが待ち続けていた主人が判明したのは、死後二十八年も経つてからだつた事、どうぞ、多くの人に与えたタローの溢れる優しさにふれてみて下さい。

「あした会えるさ」是非のご二読をお勧めします。

以上今泉文彦著「あした会えるさ」より参考にさせていただきました。

昭和三十九年石岡～鉢田間を走る鹿島参宮鉄道線（惜しまれながら平成十九年廃線）の、玉造（行方市）駅から石岡駅内で起こつた悲しい別れと、迷い犬になってしまったタロー。傷だらけになつたタローは東小学校の用務員の娘さんに助け出されました。

やがてタローは東小学校の子供さんたちと遊ぶようになり、タローと名付けられ、優しくおとなしいタローは、児童や先生、学校関係者の誰にでも、マスクのようにかわいがられていました。

青春時代に、何かに熱中して励むことはその後の人生にとって、非常に重大なことだと、恩師に再開して改めて考えさせられました。

本題の県指定文化財の紹介に入ります。

○二枚胴具足 有形（工芸品）

指定昭和四五・九・二八

具足とは、十分に備わっていることを意味し、鎌倉時代～江戸時代における甲冑の略称。この具足は遺存度が良好で室町時代末期、戦国期の特徴を備えた具足として高く評価されている。日根野型兜（ひねのなりかぶと）、篠籠手（このごて）、葦包（わづみ）、縫延脣（ぬいのべどう）、紺糸威（こんいとおどし）、佩楯（はいだて）、篠膝当（しのすねあて）一式が揃っている。管理者個人。

當時の仲間たちと恩師を囲んで昼食会を行つたのですが、当時の話に盛り上りました。

皆で一丸となつて、大会に向けての練習に励み、多くのことを学んだ、バレーボール部も今はなく寂しい思いでいっぱいです。

具足とは、十分に備わっていることを意味し、鎌倉時代～江戸時代における甲冑の略称。この具足は遺存度が良好で室町時代末期、戦国期の特徴を備えた具足として高く評価されている。日根野型兜（ひねのなりかぶと）、篠籠手（このごて）、葦包（わづみ）、縫延脣（ぬいのべどう）、紺糸威（こんいとおどし）、佩楯（はいだて）、篠膝当（しのすねあて）一式が揃っている。管理者個人。

當時の仲間たちと恩師を囲んで昼食会を行つたのですが、当時の話に盛り上りました。

皆で一丸となつて、大会に向けての練習に励み、多くのことを学んだ、バレーボール部も今はなく寂しい思いでいっぱいです。

青春時代に、何かに熱中して励むことはその後の人生にとって、非常に重大なことだと、恩師に再開して改めて考えさせられました。

○宝篋印塔 有形（工芸品）

昭和四九・三・三一

室町時代の造立と推定され、当時の高僧が経巻を塔中に納め、後の供養塔にしたものと推測される。総高一・五m、材質は花崗岩。

基礎部（まきそぎ）、塔身部（とうしんぶ）、笠部（かさべ）、相輪部（そうりんぶ）とも当時のままで、特に笠部の形が大きく、四隅の飾り突起が馬耳状とは異なり、むしろ蕨手（わらびて）状を呈する特徴が認められ、この地方独特の形態を示している。管理者個人。

・喜びと強さを贈る常総の子らに 智恵子

（常陸風土記の丘にて）

【風の談話室】
『特別寄稿』
生命の河を遡り（3）

田島早苗

加代の人力車

明治二十七年に勃発した日清戦争と、その十年後の明治三十七年に始まつた日露戦争、二大国に連続勝利を収めた日本は、すっかり舞い上がり、世界を相手に強気の外交を推し進め、孤立を深めていった。

忍び寄る世界大戦の足音が聞こえて来そうな、明治三十九年六月、下村加代は、誕生した。

両親の留吉、登代夫婦は、力を合わせて始めた機織り業が軌道に乗り、事業拡張のため猫の手も借りたい忙しさで、育児に割く時間が惜しく、加代

は生後六ヶ月で、登代の実家に預けられ、祖母ヒサノに育てられることに成った。

ほぼ毎月訪れる登代は、加代と過ごす束の間を目一杯楽しんで帰つて行くのが常だった。美しく優しい母が自慢の加代だったが、「おつかさん」と呼びながらも心から甘えられず、一緒に過ごす時間は、何時も緊張していた。

でも、赤ちゃんの時から一緒に暮らし「おつかア」と呼んで、目一杯甘えられる祖母のお蔭で、何の不満も感じていなかった。

たつた一度だけ、後から生まれた二歳年下の弟や、その次に生まれた妹が、両親のもとで暮らしているのを知つた時に、「何でわしだけおつかアの家に居るンじや」と祖母に聞いたことがある。「祖母ちやんが、可愛い加代と一緒に暮らしたいからじや」と言う祖母の言葉に納得したわけではなかつたが、加代は二度とそのことは口にしなかつた。毎月登代から届けられる豊潤な金品と、優しい祖母の愛情に包まれ、伸び伸びと育つっていた。

明治天皇の崩御、大正天皇の即位と言う歴史上大切な節目の年の大正二年、小学校に入学した加代は、唱歌の時間が大好きで、先生のオルガンに合わせて歌つていると、小学校に入った喜びが湧いてくるようだつた。学芸発表会で「冬の夜」を独唱したことは、加代の生涯の誇りで、子供達にも歌つて聞かせたりした。

次に好きなのは体操の授業。しかし、運動場が狭く、運動会は何時も近くの神社前の広場で行われた。駆けっこ得意な加代は、体操の授業が少ないので残念でならなかつた。

遠足は学校の大切な年中行事だった。何時もは、

古びた筒袖の普段着にわらじ履きで学校に通つていた子供たちだが、遠足の時には、あまり汚れていない着物を着て、梅干を入れた「日の丸お握り」の包みを白い布で斜め掛けに背負い、布を巻いた藁を踵の部分に編み入れた新しいわらじを、しっかりと足に結わえ、嬉々として集まつた。

今では考えられない程長い道のりを、きちんと整列して元気に進みながら、一小節ごとに歌う先生の小学唱歌を復唱する子供たちの、明るい元気な声が、田園風景に溶け込んでいった。まるで、軍国主義日本の縮図の様に。

勉強は嫌いではなかつたが、加代が一番好きなのは、友達と遊ぶことだった。石蹴り、縄跳び、鬼ごっこ、かくれんぼ。春は草花を摘んで作る花の冠、夏は小川で水遊び、雪が降れば雪だるま、雪兎、外で遊ぶ種は一杯だったが、伊吹風の吹く寒い日には、我が家に友達を招いて、おはじきやお手玉に興じることもあり、何時でも何処でも、加代は女王様だった。

大正三年に、第一次世界大戦が勃発、それが日本への泥沼への第一歩だった。下村家の機織り業は、時流に乗つて大成功。K城下町の一等地の広大な敷地に、下村織物工場と併用して、中庭を挟んだ大邸宅を構え、従業員も増え、母登代は、増え忙しい日々を送つていた。

しかし、勉強より、遊ぶことが大好きな加代が心配でならず、K高女を受験させると決めた登代は、ある日、女学校生活の素晴らしさを、三年生の子供にも分かるように話し「今までの様に遊んどつたら、素晴らしい生活が待つている女学校へ入ることは出来ないよ！ 今から受験の準備を始めるの、もうお遊びはおしまい！」と厳しく言い

聞かせた。

母の話を聞いて、どうしても女学生になりたくない。ぶつかり遊びを止めた加代は、夢中で勉強を始めた。やり出せば勉強は面白く、学力も増していく。

大正七年、念願の女学校に合格したのを機に、父母の家に帰った加代は、一変した生活様式に戸惑うことも多く、口うるさい父にも中々馴染めなかつた。然し女学校に通い始めると、すぐに友達が出来、魚が水を得た様に、楽しそうな日々を送れる様になつていつた。

学校から帰つても家業は手伝わなかつた加代だつたが、長女としての責任感は徐々に芽生え、妹や弟に勉強を教えたりしながら、忙しい母の手助けをと、奥向きの仕事を頑張るようになつていった。二歳年下の弟新吉が病を得て、加代と入れ替わる様にヒサノ祖母ちやんの家で療養するため移つていつたのもその頃だつた。

この年に第一次世界大戦は終結したが、物価の高騰は天井知らず、特に米は、商人の買い占めもあつて高値が続き、庶民の暮らしは窮屈を極めていた。日本各地に米騒動が勃発、日本経済の大ビンチだつた。混乱の経済は中々立ち直らず、中小企業は綱渡りの毎日を強いられていた。この非常時を乗り切るため死力を尽くしていた下村織物では、留吉の機嫌が悪く、従業員や、職工はおどおどしていた。それを、陰に回つてさりげなく慰めるのが優しい登代の役目だつた。

加代が女学校二年生のある日「下村さん、お家から人力車のお迎えです。すぐ支度をしてお帰りなさい」先生の心配そうな言葉に大慌てで人力車に乗り込んだ加代は、気もそぞろで初めて乗る人

力車を楽しむ余裕も無かつた。

「お母さん、どうしたの、何があつたの？」息せき切つて飛び込んだ家では、母の笑顔が待つてゐた。「鬼の居ぬ間に命の洗濯だよ」父留吉が一泊で商用に出かけた絶好の機会を逃さじとばかり、しまり屋の父が眼を光らせている時には、口にすることも出来ない御寿司や素晴らしい御馳走が並び、従業員にも振舞われたのだつた。

この年の秋、祖母の家で療養していた弟新吉が、ひつそりと黄泉へ旅立つていつた。加代とは縁の薄い弟だつたが、やせ衰え、祖母一人に看取られた最後を想い、しばらくは涙ぐむことが多かつた。この時、登代の母としての深い悲しみと苦しさを思いやることが出来なかつた加代は、後々まで後悔を引きずることに成るのだった。

加代が女学校三年の夏、日本初のメーデーが日本比谷公園で行われた。この年、初めてオリンピックに参加するなど、国際社会の仲間入りを果たした日本だつたが、世界情勢は予断を許さぬ暗雲が立ち込めていた。

末の第三吉は受験勉強に取り組みだしたが、体が弱く、すぐ熱を出すのが心配の種だつた。ようやく受験にこぎつけて合格したのに、体調を崩して長期入院、一度も中学校の門を潜ることが出来なかつた。啄木に傾倒し、独学で文学にのめり込んでいた弟に触発され、看護している加代も文系がぶれになつて居た。弟の病気を聞きつけた宗教団体が、暫し入信を勧めに訪れ、「悪しきを払つて助けた——まえ○○教の——」と歌いながら祈りを捧げるのが面白く、信者の人には申し訳ないが、後年、加代の得意な物真似のネタになつた。

加代が女学校を卒業するのを待つて、留吉のお

気に入りの甥との縁談が持ち込まれた。事業に成功して、岐阜市の中心部で、大きな工場を営んでゐるこの甥つ子に添えば、必ず幸せになれると思ひ込んでいる留吉の、執拗な薦めをどうしても受け入れられなかつた加代は、父との距離が益々開いていくのを感じていた。

日本中に不況の嵐が吹き荒れる中、大正十二年に起きた関東大震災は、日本経済を壊滅的に打ちのめした。絹糸や織物の価格が大暴落、倒産する企業が後を絶たず、街には流言飛語飛び交い、失業者が溢れた。下村織物は、留吉の才覚で何とか持ちこたえていたが、その頃から下村家にも不幸の影が静かに忍び寄つていた。

ようやく三吉が小康を得て自宅へ戻つた頃、こま鼠の様に働き通しだつた母登代が、体調を崩し寝込むことが多くなつてしまつた。自慢の恋女房に寝込まれた留吉は、専門の看護婦を雇い、金に糸目をつけない万全の看護体制を整え回復を祈つていたが、加代と看護婦の必死の看護も虚しく、大正の終焉に合わせるように、波乱の人生に幕を引いてしまつたのだった。

非常時だつたが登代の葬儀は盛大に行われた。見も知らぬ会葬者で溢れる会場では、「これ奥様に頂いた着物です」「困つてゐるときに奥さんに助けて頂きました」等と涙ながらに語る人が後を絶たず、焼香しながら泣き崩れる人も多かつた。困つてゐる人を見たら、着てゐる羽織をその場で脱いで与えた登代、誰にも満遍なく優しかつた登代、自分たちの知らなかつた登代の一面を知り、新たな涙にくれるばかり。

従業員の間では、「奥さんは独樂の舞い倒れだよ」と密かに囁がれていた。働き通しだつた登代

の一生を想う時、誰にもぶつけられない怒りと後悔の涙が溢れ、中々立ち直れない加代だった。頼りにしていた愛妻を亡くした留吉の悲しみ惚けた

顔さえ疎ましく、母を死に追い込んだのは父だと一途に恨みを募らせ、葬儀が済むと母の看護をしてくれた看護婦を頼つて、家出を決行。名古屋へ向かう列車に飛び乗った。

加代は、昭和二年、大きな病院の看護婦として、自立への第一歩を踏み出した。当時、女学校出の看護婦は珍しく、医師から「インテリ看護婦さん」と、もてはやされながら、加代の充実した青春が始まった。

下宿は、様々な人間模様の埠堀だった。隣の一部屋が、文学青年の溜まり場になつて居て、第三吉の影響で文学かぶれになつていた加代は、病院勤務から帰ると、食事や茶菓を差し入れ、青年達の熱い文学論や時事論を、一人前の顔で聞き入つていた。

やがて、文学仲間の鶴丸健三と割りない仲になつた加代は、三河武士の末裔だと言う鶴丸家に挨拶に出向いた折に「太陽に向かつて石を投げているような健三だから加代さんは苦労するよ」凛とした佇まいの母親が呟いた言葉が、胸の奥に 澱となつて沈んでいった。

下村織物も、ご多分に漏れず四苦八苦で、金策に駆けずり回る留吉は、世間の冷たい風と、登代の居ない虚しさに打ち勝てず、何とか余力が残つ

ているうちに、織物業界から撤退しようと考え始めていた。

「金が無いのは首がないのと同じじや」「金があれば蜜に集まる虫の様に人が集まる」「金が無ければ誰も湊さえ引つ掛けぬ」

世間の冷たさを呪う言葉を誰彼となく呟きながらも、自分の早い決断のお蔭で残つた家屋敷を守り、婚期の遅れた三吉に、立派な嫁女を迎えるのが、留吉の唯一の生き甲斐になつた。

第三吉の知らせで、登代の三回忌の法要が営まれることを知つた加代は、今迄不義理を重ねてきましたが、今回はどうしても参列したいと、久し振りに岐阜のわが家へ帰つた。

然し加代を待つっていたのは、「勘当したのだから家の敷居は一步も跨ぐことはならぬ」と言う留吉の激しい怒りの言葉だった。「勝手に家を捨てた娘に用はない!」「でも叔父さん、叔母さんのご供養だから、此處は抑えて、抑えて」と宥めてくれたのは、以前縁談を断つた従兄だった。二児の父となり、貫禄も付いたその人のお蔭で、法要にも参列できたが、いくらお気に入りの甥っ子の執り成しとは言え、すぐに怒りの鉢を収めた父の衰えに胸を突かれていた。

懐かしい我が家はがらんどうだった。工場だった広い空間で大声を出すと、父母や織子たちの思いが木靈となつて溢れ返つて来るような気がして、落ち着かなかつた。邸内を一巡りしただけで、結婚の事は言い出せないまま、再び名古屋へ戻る加代の足取りは重かつた。

続く

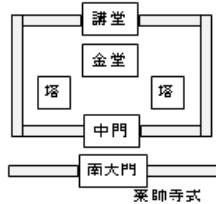
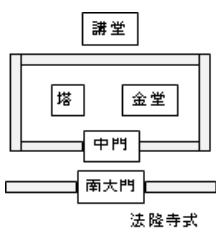
《読者投稿》
私の國府巡り「護国之寺」 京都府精華町今井 直

国分寺巡りを始めてかれこれ十年になる。改め数えてみると、これまで訪れた国分寺は五十二ヶ所。お寺巡りと言つても御朱印を集めわけではない。歴史探訪だから廃寺ばかりどこへ行つても礎石や古瓦などの出土品しか残つていなければ、つくづく地味な趣味だと思う。国府に関連する神社仏閣に行くと、先ずは手水舎へとマナーは守る。しかし、賽銭は入れないし祈願もせずに写真を撮るだけだから、罰当たりな奴だと思われるだろう。

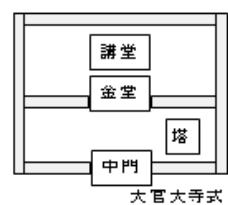
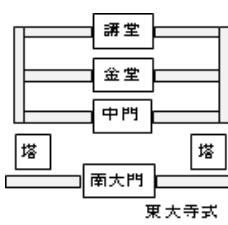
巡り始めたばかりの頃は知識もなく、国分寺というだけで闇雲にあちこち訪ねていた。ある時、天橋立に向かつて由良川沿いの国道を車で走つて天橋立に向かつて由良川沿いの国道を車で走つていると、「安寿と厨子王ゆかりの寺・国分寺跡」の大きな看板が目についた。そうか、厨子王がかくまわれたのは丹後の国分寺だった。そこは毘沙門堂という小さなお堂で、近くには山椒大夫の屋敷跡もあった。古くからその地に伝わる物語をヒントにした森鷗外の小説だから、史跡の国分寺とは関係がなかつたのである。

天平十三年(741)、聖武天皇は国ごとに国分寺を創建させる詔を出した。蔓延する疫病や度重なる干ばつ・飢饉と群発地震、さらに地方の反乱など世の中は恐怖と不安で大混乱だつた。仮にすぐり国家安泰と万民豊楽を祈願するための国家的大事業だったが、建築技術や資材・人手不足など各國の事情により、造営は遅々として進まなかつた。何度も建立督促の詔を出してテコ入れし、造営の完了には長い歳月を要したのである。

国庁とともに、国分寺はその国で最大の建築物であった。境内には、塔・金堂・講堂・経蔵など莊嚴なお堂が建ち並び、一般的に「七堂伽藍」と呼ばれる。だが、伽藍の配置は全国一律ではない。建立の詔には、「諸國はそれぞれ七重塔一基を敬つて造り」とあり、仏舍利「釈迦の遺骨」を納める建物が、七重塔または五重塔だった。時代により塔と金堂の位置が変化し、伽藍配置が違つてくる。飛鳥時代は塔が伽藍の中央にあったが、奈良時代になると本尊仏「釈迦如来」を祀る金堂にセンターポジションを譲り、塔は法舍利「經典」を安置する象徴的な存在に変わる。お釈迦様のお骨が大量にあるわけないから当然だろう。



時代順にもう少し詳しく見ると、飛鳥寺式では伽藍の真ん中にある仏舍利塔を、東金堂・中金堂・西金堂と三つの堂宇が取り囲む。四天王寺式では金堂が一つで、南大門・中門・塔・金堂・講堂が一列に並び、塔はまだ伽藍の中心だ。法起寺式になると、中央の金堂と塔が横並びで回廊がそれを囲む。法隆寺式は法起寺と似るが、金堂と塔は左右が逆で東側に金堂、西側に塔が建つ。薬師寺式では、中央の金堂の前に塔が東西に二基置かれ、装飾的に扱われた。そして東大寺式では、金堂が完全にメインとなり、塔は回廊の外に出されてしまう。さらに大安寺式では、塔は伽藍の外の南大門前に追いやられ、すっかり形式化してしまうのだ。



時代順にもう少し詳しく見ると、飛鳥寺式では伽藍の真ん中にある仏舍利塔を、東金堂・中金堂・西金堂と三つの堂宇が取り囲む。四天王寺式では金堂が一つで、南大門・中門・塔・金堂・講堂が一列に並び、塔はまだ伽藍の中心だ。法起寺式になると、中央の金堂と塔が横並びで回廊がそれを囲む。法隆寺式は法起寺と似るが、金堂と塔は左右が逆で東側に金堂、西側に塔が建つ。薬師寺式では、中央の金堂の前に塔が東西に二基置かれ、装飾的に扱われた。そして東大寺式では、金堂が完全にメインとなり、塔は回廊の外に出されてしまう。さらに大安寺式では、塔は伽藍の外の南大門前に追いやられ、すっかり形式化してしまうのだ。

各国分寺の伽藍配置は、総国分寺である東大寺の様式が多数を占める。東大寺には、高さがおよそ百メートルと想定される七重塔が東西に二基あつたが、建立の詔には、「諸國はそれぞれ七重塔一基を敬つて造り」とあり、仏舍利「釈迦の遺骨」を納める建物が、七重塔または五重塔だった。時代により塔と金堂の位置が変化し、伽藍配置が違つてくる。飛鳥時代は塔が伽藍の中央にあったが、奈良時代になると本尊仏「釈迦如来」を祀る金堂にセンターポジションを譲り、塔は法舍利「經典」を安置する象徴的な存在に変わる。お釈迦様のお骨が大量にあるわけないから当然だろう。

諸国の国分寺では塔は一基だけだから、東大寺式は国分寺式と呼ばれることがある。上野国分寺（高崎市）・武藏国分寺（国分寺市）・播磨国分寺（姫路市）などが国分寺式で、いずれも大国だから七重塔は高さが六十メートルを超える。伽藍は天平文化の粹を集めたりだつたと云われる。上国にランクされる出雲（松江市）・遠江（特別史跡／磐田市）・備前（赤磐市）・安芸（東広島市）・信濃（上田市国分）などの国分寺も東大寺式の伽藍である。

下總国分寺（市川市国分）や相模国分寺（海老名市国分）は法隆寺式。丹波（龜岡市）・備中（総社市）は珍しい法起寺式。さらに大官大寺式という伽藍配置もあり、上総（市原市惣社）・美濃（大垣市）・筑前（太宰府市国分・甲斐（笛吹市）一宮）などの国分寺では、中門・金堂・講堂が一直線に並び、金堂と中門を結ぶ回廊で囲まれた内側の東寄りに塔を置く形である。



天平寺

金光明四天王護国之寺「僧寺」に僧が二十人、法華滅罪之寺「尼寺」には十人の尼僧が、それぞれ僧坊・尼坊に住まいしていた。僧寺と尼寺は距離を置いて建てること。僧尼は教戒を受けること。日々の読経と写経のほかに、毎月八日には必ず最勝王経を読むこと。その上、僧尼としての厳しい戒律があり、常に国司の監査を受けていた。寺の財源は、僧寺に封戸五十戸と水田十町、尼寺に水田十町が施されていたなどと、聖武天皇の詔にある。僧尼たちは国家公務員だから、食うには困らなかつたが生身の人間だ。俗世間とは違う環境でどのような日常生活を送っていたのだろうか？気にはかかるが謎に包まれたままだ。国分寺は鎮護國家を祈る場であつたが、当時の仏教は教理を学ぶ意

年代や造営に関わった技術集団・国の経済力などが分かるという。讃岐国分寺（特別史跡／高松市国分寺）と紀伊国分寺（紀の川市東国分）は酷似している。諸国（高崎市）の国分寺では塔は一基だけだから、東大寺式は国分寺式と呼ばれることがある。上野国分寺（高崎市）・武藏国分寺（国分寺市）・播磨国分寺（姫路市）などが国分寺式で、いずれも大国だから七重塔は高さが六十メートルを超える。伽藍は天平文化の粹を集めたりだつたと云われる。上国にランクされる出雲（松江市）・遠江（特別史跡／磐田市）・備前（赤磐市）・安芸（東広島市）・信濃（上田市国分）などの国分寺も東大寺式の伽藍である。

各国分寺の伽藍配置は、総国分寺である東大寺の様式が多数を占める。東大寺には、高さがおよそ百メートルと想定される七重塔が東西に二基あつたが、建立の詔には、「諸國はそれぞれ七重塔一基を敬つて造り」とあり、仏舍利「釈迦の遺骨」を納める建物が、七重塔または五重塔だった。時代により塔と金堂の位置が変化し、伽藍配置が違つてくる。飛鳥時代は塔が伽藍の中央にあったが、奈良時代になると本尊仏「釈迦如来」を祀る金堂にセンターポジションを譲り、塔は法舍利「經典」を安置する象徴的な存在に変わる。お釈迦様のお骨が大量にあるわけないから当然だろう。

諸国の国分寺では塔は一基だけだから、東大寺式は国分寺式と呼ばれることがある。上野国分寺（高崎市）・武藏国分寺（国分寺市）・播磨国分寺（姫路市）などが国分寺式で、いずれも大国だから七重塔は高さが六十メートルを超える。伽藍は天平文化の粹を集めたりだつたと云われる。上国にランクされる出雲（松江市）・遠江（特別史跡／磐田市）・備前（赤磐市）・安芸（東広島市）・信濃（上田市国分）などの国分寺も東大寺式の伽藍である。

官大寺式の主要伽藍は両寺とも西側に偏り、東側には大きな空白地がある。ここは菜園などに利用していたそうだ。讃岐国も紀伊国も行政区分では同じ南海道に属している。さらに『続日本紀』天平勝宝八年（756）十一月の条に、「聖武天皇の一周忌の斎会に際し、讃岐国・紀伊国など二十六カ国に灌頂幡（かんじょうのはた）を頒（わか）ち下し、使用後は金光明寺「国分寺」に永く寺物として收めおくよう」の記述がみられ、この時までに両寺が国分寺として整えられたことがわかる。ほぼ同時期に、同じプロジェクトチームか、または関連チームの手により、造営は完成を見たと考えて間違いはあるまい。

金光明四天王護国之寺「僧寺」に僧が二十人、法華滅罪之寺「尼寺」には十人の尼僧が、それぞれ僧坊・尼坊に住まいしていた。僧寺と尼寺は距離を置いて建てること。僧尼は教戒を受けること。日々の読経と写経のほかに、毎月八日には必ず最勝王経を読むこと。その上、僧尼としての厳しい戒律があり、常に国司の監査を受けていた。寺の財源は、僧寺に封戸五十戸と水田十町、尼寺に水田十町が施されていたなどと、聖武天皇の詔にある。僧尼たちは国家公務員だから、食うには困らなかつたが生身の人間だ。俗世間とは違う環境でどのような日常生活を送っていたのだろうか？気にはかかるが謎に包まれたままだ。国分寺は鎮護國家を祈る場であつたが、当時の仏教は教理を学ぶ意

味合いが強く、今日のような葬式仏教ではなかつた。現在でも南都六宗と云われる奈良の寺院では、葬儀は一切行わない。

奈良仏教が興隆したのは万葉集の時代とほぼ重なる。だが、万葉集にはなぜか仏教の匂いがほとんじない。万葉集には珍しく、国分寺の僧侶の歌が残されている。越中守・大伴家持との宴席での歌だ。作者は「講師（こうじ）僧惠行（えぎょうう）」。講師とは国分寺の最高位にあり、国内の僧尼を管掌する僧侶だという。惠行は越中国分寺の住職だったと思われる。

我が背子が 捧げて持てる ほほがしは

あたかも似るか 青ききぬがさ

（卷十九—四—〇五）

（家持様、あなたがお持ちの朴葉は、

まるで青い衣笠のようですね）

なんだ、只それだけで他愛無い駄作かと言うなけれ。大きな朴葉は神様にお供えする食べ物を盛る器である。それをトップクラスの貴人しか差ヨイショしているのだ。従五位上だった家持は、いささか照れくさかつただろう。

国司の最も重要な仕事は、都に納める租税の徵

收だが、軍事・警察・訴訟の他、インフラ整備など多岐にわたる。祭政一致の時代だから任国の神々に奉幣を行うのも大切な務めであった。毎月初めには全ての神社を一之宮から順に参拝するのが習わしだった。百社を超える國もあり、国司は巡拝の近くに各祭神を合祀した總社を設け、まとめて祭祀を行うように簡略化された。また新たに着任した国司は、總社で任國の国印と正倉「租税を

一時保管する蔵」の鍵を受け取る儀式があつた。これは任國の神々に国司としての承認を得るセレモニーだったようだ。令制下では全国に六十八力國あつたが、一之宮が一社も欠けることなくすべて現存しているのは、やはり日本は八百万の神々がおわす「神國」だからなのだろうか？「（注）紀伊国には、丹生都比売（にゅうつひめ）神社（世界遺産、日前（ひのくま）ひのくま）神宮・國懸（くにかかす）神宮、伊太祁曾（いたきそ）神社の三社が一之宮を主張し、現在わが国に一之宮は百社余りある」

「七重塔を持つ国分寺は國の華であり、必ず良い場所を選んでまことに長く久しく保つよう」にと、建立の詔にあるが、聖武天皇の願いはやがて消滅する。国分寺の維持管理には莫大な経費が必要であった。莊園制の浸透により律令制度が揺らぎ、天皇を中心とした中央集権的な体勢が崩壊するなど、國家の保護が失われた国分寺は衰退の一途をたどつた。また地震・台風・落雷による倒壊や焼失からの復興は極めて困難だった。一方で、平安期末から鎌倉期には仏教觀にも変革が起きた。国家や貴族のための仏教が、次第に民衆の救済のための宗教となり、国分寺は歴史の彼方に忘れ去られていったのである。

元々、国分寺の本尊は釈迦如来とされたはずだが、法灯を繼ぐ現国分寺ではほとんどが薬師如来だ。淡路国分寺と若狭国分寺の二寺だけが丈六の釈迦如来を伝えている。平安中期に、衰亡しかけていた多くの国分寺が、当時の仏教思想の潮流に従つて、薬師如来を本尊にお迎えしたと聞く。

多くの国分尼寺は存続が難しくなると早々と廃れ、再興されることもほとんどなかつた。しかし、鮮やかな天平の色彩「朱と青丹」と、かつての華

やかさが蘇つた尼寺跡が二カ所ある。上総国分尼寺跡（市原市国分台）では文化庁の史跡整備特別事業として、中門と回廊及び金堂（基壇のみ）が遺構の上に実物大で復元され、平成九年に完成した。平成十七年には、三河国分尼寺跡（豊川市）で中門及び回廊の一部が遺構の上に復元された。復元は発掘調査結果に基づき、古代の建築技法を用いて天平文化の建築様式を再現した施工となつていて、美しく整備された史跡公園は、歴史的文化遺産を体感できる場として広く活用されている。

奈良時代から続く「護国之寺」が、現存するのは東大寺だけである。国分寺と名の付く後継寺院が、たいてい国分寺跡の近くや創建時の境内と重複して存在するが、真言宗や曹洞宗などと宗派が異なる。先日、信濃国分寺跡へ行つたついでに、現国分寺に立ち寄つてみたら、境内に「真田徳川会見の地」という石碑が、両脇に真っ赤な「真田丸」の幟を従えて建つてゐるではないか。恐るべし大河ドラマ！上田城に籠る真田昌幸が秀忠に降伏すると見せかけて、徳川の使者と会見したのがこの信濃国分寺だつたのだ。寺の人尋ねると、室町期に建てられた三重塔（重文）は、真田VS徳川の上田合戦でも焼失を免れたといふ。

仁王門の前の寺号標に「八日堂信濃国分寺」とある。天台宗の寺だが、現在でも毎月八日に「光明最勝王經」を転読しているそうだ。それで「八日堂」。千二百年以上前の中世天皇の詔勅を、今まで頑なに守り続けているとは、まさに驚きだ。神社仏閣の参詣ではいつも罰当たりな私だが、この時ばかりはほんの志しだけ淨財を供えて、八日堂をあとにした。

花粉が舞っている、春がやつてきた…（3月）

・猫の日

お隣には、たくさんの猫がいる。高齢のお婆ちゃん（95歳）が、押し車で庭に出ると、行列を作りゾロゾロと…。お婆ちゃんが椅子に座ると膝の上や足元に纏わり、体を撫ぜられて喜ぶ。猫も人間もマツタリとして、まるで別世界…。その猫は我が家にも数匹やつてきて、「ご飯だよー！」の呼び声で帰つて行く。デイサービスの日には、玄関先で帰りをまつてゐる、何とも可愛いものです。

・もう直ぐ春が

ここ数日の激しい寒暖の繰り返しに体がついていけない。三寒四温は、春に向かう証し…。寒さの中にも、其処此処で春の兆しを楽しむ事が出来る。八郷支所の隣にある、中央公民館の雛飾りを見に行く。此処の雛飾りは毎年愉しみにしている。吊るし雛、手作り雛、和紙雛…どれも驚くような作品。子供たちのお雛様も、ひとつひとつが丁寧で感心した。我が家の中では、水仙やクロッカスの花も咲き、春を感じている。

・田舎の朝は早い

隣の牛屋さん、まだ暗いうちから牛舎に出向き大音量でラジオを鳴らす。そして、煙草農家のトラクターが唸り、道向こうの葡萄農家は出勤前の一仕事。我が家の中も早い、4時過ぎには囲炉裏が赤々と燃え、コーヒーのいい香りがする。そして、夫はコロちゃんに急かされ散歩に出る。私は囲炉裏の火で豆を煮、大鍋で出汁を作る、そして

夏蜜柑のジャムづくり…。春の味、蕗みそも作らなければ、一息していると訪問者が来る。予定があるということは幸せ。

・直売所の雛飾り

友人が直売所をやつてゐる、石岡市の外れで駅からは遠い…。新鮮野菜を中心に、米や佃煮、お菓子、鉢植えや仏花を販売している。また、近くの支援者さんが様々な手作り品（お手玉・小物入れ・マフラー等々も置いてある）を安く販売している。数日前には準備中だったお雛さまが見事に飾られていた…。店に入ると壁には懐かしい子供の着物が、そして創作雛や段飾りのお雛様がいっぱい。我が家は、男の子だったので縁が無かつた、今になつて雛祭りを楽しんでいる。

・もう一度聴きたい

夜中の微睡：深夜ラジオから、イエペスが弾いているアランフェス協奏曲がここちよく、もう一度聴きたく、夫のCDコレクションを探すが見当たらぬ。そうだ、こういう時はパソコン（Youtub）で聴けば…！　何とか、アランフェス（イエペス演奏）を視聴出来た。パソコンのデビューは昨年夏、文章を考え文字を打つのも大変？毎日フェイスブックで、頭を悩ましている。ウーン？　あうだ、こゝだ：どうでもいいような事を。

それでも、パソコンの前に座ると、一人前の気分が？パソコンを扱う姿に憧れていたから。

・長年の夢

朝から冷たい雨がチラつく、ドンよりとした天気。頭が重く体もダルく、グダグダを決め込んでいた。夫はカメラマンのN氏から、南山崎の交差点で風景を撮影中（TVの仕事で北海道の富良野らしい映像）と連絡

がある。この辺りは平かな丘陵地、畑が広がり富良野を彷彿させる。近くに「富良野」と言う、蕎麦やピザ、珈琲を提供しているログハウスの店がある。

久し振りのN氏を「ブックカフェえんじゅ」に誘う。コーヒーの後、近辺（青柳）を案内、隣の茅葺屋根の古民家、此処は何度も映画のロケに使われる、何年か前に賠償千恵子さんがロケに訪れた。田んぼが広がり、初夏には虫が乱舞すると言う。周りに雑木林：田んぼ道を少し歩いて行くと木崎邸（良く観光で案内される）：どつしりとした茅葺屋根（筑波流）が美しい。よく手入れされ庭に、古木の梅花が見ごろだった。

・クラフト展

フラワー・パークで、クラフト作家による展示販売へいしおかの里山クラフト展が開催。普段は車で一杯の駐車場に、テントがたくさん並んでいた。筑波在住の義妹と初日に参加する、陶器、木工、ガラス、皮、竹、金属…・アクリセサリーや着物リメイク、たくさんのお品が…。其々のメントを覗き品定め、各作家とのお喋りも楽しかった。新潟からの作家は、3日間も車中泊。

「慣れています」と言つていた。義妹は気に入つた陶器のピッチャを…。私は大島紬リメイクの小物を（紬で作られたネックレスには、ソロバン玉が）あまりの可愛さに、思わず買ってしまう！

にお隣さんが回覧板を届けに、玄関先でまたまた立ち話し…。すでに昼過ぎ、いつの間にか頭もスッキリしたので、散歩に出掛ける。

庭には春の花が咲き始め、水仙・クロッカス・クリスマスローズ。梅は満開、木瓜の花も咲き始めた。今年こそ、長年の夢のお花畠を…。

・クラフトの師匠

昨年までエコクラフトを習っていた〇さんに、助け舟を急遽要請…。数時間の指導で思い出し（鎧編み）無事解決をする。お茶の時に『ミカンとり』ゴの『ドライフルーツ』を出す。この菓子は、茨城県出身の作家『折原みと』（漫画や小説で人気）が作ったもの。彼女は『ブックカフェえんじゅ』オーナーのKさんの妹。ドライフルーツは香りも良く、美味しかったので買い求め、大事に飾つておいた。お菓子とお茶、そしてお話しを、楽しい時間はアツと言う間に過ぎる。我が家家のエコクラフト会のため、お渡いをしなくては…！

・こんこんギャラリー

しぶたあきこ絵画展（＝可否時間）「アレ～？こ

の絵、何処で見たのかな…」そうだ！ 先日イベ

ントで見た絵だ！ 大きなスクリーンに映された

メルヘンチックな絵、歌とピアノを背景に…？

誰が描いた絵かな？ズット気になっていた。「この

絵だ！」彼女に聞いてみると、演奏していたリリ

イさんから、詩に合った画を依頼されたとか。気

に入った絵に再会できビックリ。絵に囲まれて飲

んだ珈琲、杉の木で作られたカップ：絵も珈琲も

器もみんな美味しかった。

・飾り棚

八郷は木工製作のメッカ…？ そして、多くの素人が木工細工を楽しんでいる。夫も数年前から、木工（子どもの工作程度）に凝っている。諸々の道具も揃ってきた、時間が出来たお蔭で、ハウス（作業所）の整理も進んだようだ？ 終活整理中…小物

を飾る棚が、どうも気に入らない。奥行のある棚はあるが、と夫に話をしたら、任せろ。暫くハウスの中でトントン。出来上がり、壁に設置！ 出来はまあまあ、でも和紙の模様が目立ち過ぎている、しばらくはいいか？

・コロちゃんの活躍

我が家に転がり込んで16年。コロちゃんは既に老犬。それでも必死に家を守り「もう朝だよ！」『散歩の時間だよ！』「知らない人が来たよ！」欠かさず役割を果たしている。何よりも一番は私たちを、癒し和ませてくれる。そんなコロちゃんの仕事が一つ増えた？ 夫の自転車に付き合うことが、隣り地区にある山崎の交差点まで…。その光景は、巷での噂になっている様だ。老体に鞭打つて、主人の介護（苦労様）！

私が家に転がり込んで16年。コロちゃんは既に老犬。それでも必死に家を守り「もう朝だよ！」『散歩の時間だよ！』「知らない人が来たよ！」欠かさず役割を果たしている。何よりも一番は私たちを、癒し和ませてくれる。そんなコロちゃんの仕事が一つ増えた？ 夫の自転車に付き合うことが、隣り地区にある山崎の交差点まで…。その光景は、巷での噂になっている様だ。老体に鞭打つて、主人の介護（苦労様）！

・某月某日

堀江実穂

天気の良い日でも、ベランダに洗濯物を干すことが出来ない。

カーテンを閉めていないと誰かが覗いているような気がしてならない。

外の風に当ててカラツと乾いた下着や服を着た

でも、外に干すのが怖いのだ。

この恐怖心は何時になつたら消えるのだろうか。

い。

でも、外に干すのが怖いのだ。

・某月某日

つい最近まで、子供を見るのが辛かつた。自分の子供を思い出してしまったり、子供達と一緒に暮らせない辛さに、感情が高ぶつてしまっていた。

ランドセルを背負つて歩いている小学生を見ると、どうしても自分の子供とダブつて見えてしまった。だからなるべく小学校の登下校の集団に重ならない時間を選んでいた。

でも最近、デイケアの帰りに、病院の近くの小学生と出会つたとき、子供達から元気な声を掛けられた。

・某月某日

「おばちゃん、こんにちはー！」

次々子供たちが声を掛けてくる。

子供達の届かない声掛けに、私もつられて、精一杯の笑顔をつくつて「こんにちは。元気だね」と返事を返した。

その瞬間、私の気持の中から、わだかまりが消えて行つた。

精一杯に明るく毎日を暮らそう。

・某月某日

洗濯泥棒にあつてから、カーテンを開けること

が出来ない。ベランダのガラス戸も開けない。

家にいるときは、陽の光を浴びることも、爽やかな風を通り抜けさせることも出来ない。

『風の弦き』

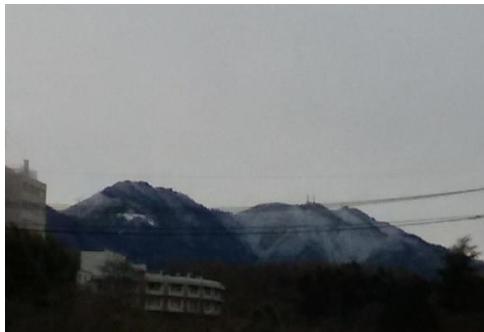
風と戯れて

・桜陽の輝き

池に映る景色が二倍に楽しめる

『朝靄の水面に映る 桜陽かな』

木下明男



・終焉

山々の雪解け眺めて終わりの始めを鑑みる
『雪融けに 永久の終焉を 垣間見る』

・若菜摘み

菜の花畠を見て少女のようにはしゃぐ妻

『若菜摘み 緑のキヤンバス 燥ぐ妻』

代の古都ポツダムの森に囲まれたツェツィーリエンホフ宮殿に米英両国首脳が集まり、中国の蒋介石総統にも電話で同意を求めて「早く降伏しない！」と日本に呼び掛けをした。蒋介石氏は日本の陸軍士官学校に留学していたから日本のこと良く知っている。ロシア（当時のソ連）は後出しジャンケンの様に勝組に加わったから「ポツダム宣言」には関与していない。その親切なオジサンたちは蒋介石氏のほか、米国のトルーマン、英國のチャーチル各氏である。チャーチル氏などは何日も泊まつて日本の返事を待つていたらしい。



ポツダム宣言

打田昇三

其の頃のことを記憶して居られる方も少なくはないと思っていると思うが、昭和二十年（一九四五）八月十五日は一般に「終戦の日」と呼ばれ、大日本帝国が米英などの交戦国に降伏を申し入れた日である。事務的には日本が「ポツダム宣言」を受諾すると言う意思表示をした日だが実はポツダム宣言は一ヶ月以上も前に出されており、それを当時の日本を牛耳っていた愚図どもが「どうしようか？」と迷うだけで結論が出せなかつたのである。

一九四五年七月十七日、ドイツのエルベ川支流に臨むプロイセン王国（一七〇一～一八七二）時

「好奇心」こそ生残要因

菅原茂美

人類は、生来のロクな武器も持たずに、よくぞ生き延びたが、ファジカル面の武器は持たなくてはならない。事務的には日本が「ポツダム宣言」を受諾すると言ふ意思表示をした日だが実はポツダム宣言（人口）を誇るのは、なんといっても大脑発達による旺盛な好奇心や、創意工夫により新天地を切り開くメンタル面の強い意志。それが、新たな環境に順応できたからであろう。人類誕生以来の99%をアフリカで過ごし、最後の7万年前、アフ

リカからアラビア半島に少数の黒人集団が移住してきて、あつという間に全世界に拡散。アボリジニは、2万年ほどで、オーストラリアに到達した。

そして、今から、1万5千年前、ベーリング地峡を渡ったモンゴロイドは、わずか1千年でアラスカから南米チリの先端まで到達している。そして北欧に進んだ仲間は旧人ネアンデルタル人と混血し、青い目と金髪を受け継いだ。そして今、この地球を離れ、宇宙にまで足を延ばそうとしている。正に好奇心の塊である。

動物も幼少期は周囲に強い好奇心を抱くが、人類は成長しても、更にその奥にまで立ち入り、未知なる物の解明を図ろうとする。その好奇心が生存域を拡大していく。ゆえに、生残できたのは、強い者でも賢い者でもなく、新たな環境に創意と工夫で、適応してきた、チャレンジ精神旺盛な開拓精神こそ、生残の原動力となつたのである。そして既存の「型」を破り、新たな発想力の旺盛な者が、より多くの子孫を残す要因となつたのである。

展していく。人間の「業」というか、醜い一面である。

しかし人類繁栄の原動力として、祖先靈を崇拜する原始的な宗教心の芽生えにより、団結心を固めていった事も見逃せない発展要因であろう。又、先人が切り開いた道具やテクニックの改善や、言語・芸術などをしつかり受け継ぎ、生活の確実性を増していく事も、人類繁栄の重大要素であつたろう。

*

それでは今後、人類が永遠に生存を続けるための布石は、まず第一に戦争の防止。特に核・化学・生物兵器などの大量破壊兵器の即時廃絶。既存の物は全世界確実に処分する。そしていかなる国も、今後それらを保持・研究などできないよう、国際機関が厳重に監視する。

第二は感染症の発生予防・蔓延防止を完璧にする事。世界は軍事費の無駄使いがなければ、予防医学の進歩にかなりの費用を注ぎ込める。1918年のスペイン風邪は風邪ではなくインフルエンザである。世界人口20億人中1億人が、日本人口5千万人中⁵48万人が死亡した。原因は地球温暖化で永久凍土が解け、アラスカの埋葬者5遺体から、鳥インフルエンザウイルス(H1·N1)が検出された。今後温暖化により、熱帯で蚊が媒介する悪性感染症が、中緯度地帯に蔓延する可能性が大きくなる。更に「がん」の発生予防・早期治療法の開発と、健康なまま老齢期をいかに過ごせるかが、重大問題である。

そして第三は食糧生産の安定化だ。各国は自給自足が原則だが、やむを得ない場合は国際機関が、主力なバランス政策を実施する。特に現在の日本

みたいに、農地がありながら自給率39%など論外。

第四は、人口過剰の抑制策。地球の人口収容能

力は50億人といわれるが、現在すでに73億人。

毎年8千5百万人ずつ増えているので、今世紀半ばには100億人に達しそうである。諸悪の根源は人口過剰にある。人口の「自律」こそ、永遠の課題。

第五は地球の温暖化防止。すでに産業革命以来、人類の活動により、2°C近く気温は上昇している。未だに温暖化に疑問を持つ人がいるが、金星は二酸化炭素ガスが95%（地球は0.038%）もあり、

その温室効果により、表面温度は465°Cである。勿論生物など棲めない。現在地球上では生物の多様性はかなり失われつつあり、経済優先の近視眼的活動の隆盛は、人類自らの寿命を縮める事になる。智慧を働かし、子孫のためにも、環境破壊・資源枯渀に歯止めをかけなければならない。

その他多々あるが、未来の子孫達に20~21世紀の先祖達の無思慮で愚かな行動により、人類の繁栄にブレーキを掛けられ居住環境を汚された…と、恨みを買うような行動は、厳に慎むべきである。

孟蘭盆(うらぼん)

打田昇三

人類繁栄のマイナス要因として、戦争や殺人は、なぜ行われるのであろうか？？私の考えでは、それぞれの時代に、欲と腕力の強い者がより多く子孫を残した。従つて生まれる子供は一層我欲と腕力が強く、他者を無視する乱暴者が多くなる。それが積み重なれば、本能丸出しで、理性を欠く者が増え、小規模なら近隣のライバルを倒し、野生時代なら、その妻を奪つたり、縄張りを乗つ取る。時代が下れば領土侵略や財産などを奪う。日本でも長い戦国時代があつた。産業革命など機械文明が発達すれば、世界を股にかけ、侵略が行われる。もつと時代が進めば、遂に世界大戦へと発れる。もつと時代が進めば、遂に世界大戦へと發

お盆(孟蘭盆)行事は旧暦と言うか月遅れなどで行われる地方が多いようである。単純に考えれば七月十五日だと未だ梅雨も明けきらず、夏も本番では無いから、八月のほうが合っている様な気もあるが本来は七月十五日と言う日付に意義が有るのだと言う。十数年も前のことだが当時の大阪外国

語太学の教授が、或る文学雑誌に「盂蘭盆」のこととを寄稿されたのを思い出した。改めて確かめてみると概ね次の様な起源らしい。

聖徳太子の叔母に当る推古天皇の治世十四年（六〇六年）四月八日に奈良の飛鳥寺（元興寺）で「灌仏会」が行われた。一丈六尺（五メートル弱）の仏像を造り、堂に入る際に扉が小さくて入らない。

それを名工の鞍作鳥（くらつくりとり）鳥仏師が扉を壊すことなく無事に収納安置したので其の祝いに法会を開いて集まつた人々に施しをした。是が最初で、以後は毎年四月八日と七月十五日に斎会（おとき）庶民への施食を行ふ様になつた：と日本書紀が伝えていると言う。

仏教の本場インドにも四月八日の行事はあつたけれども、七月十五日は七夕行事から変化したらしく一年に一度だけ冥界から帰つて来る祖先の靈をお迎えする：是は古代オリエントで行われた「春分の日」の太陽信仰を起源とするらしい。

斎明天皇三年（六五七）七月三日、現在の博多湾辺りに数人のトカラ人（イラン人）が漂着した。彼らは都に来て七月十五日に飛鳥寺の西で祭祀を行つた。是が六〇六年に次ぐ日本で二度目の盂蘭盆会の記録になるのである。やがてイラン人は何人かを日本に留めて帰国したのだが此の時に原初的仏教行事などイランの風習が日本に伝えられたのであり「大相撲」もそうである。

私はイラン・イラク戦争後に日本では最初（世界でも一番目）にイランへ行き、地方の無名な小都市で日本の大相撲の原型と思われる道場を見ている。

土俵が盛土で無く窪んでいたが、呼び出し・行司の衣装・力士の化粧回し・優勝杯・掲額・土俵入りなど日本の相撲と変わりが無かつた。

話を戻すとイラン古代の宗教はゾロアスター教（捧火教）であり、火を始めとして自然を尊重する宗教である。少なくはなつたが、イランの地方都市には其の寺院が現存している。此の宗教では死者を火葬にも土葬にもせずに、近くの山の上に安置（放置とも言う）してくるのである。

火は何千年も前から燃やし続けている「聖火」であり祖靈を迎えるのに使われる。日本では其の名残が「盂蘭盆行事」になつており「聖なる火」で迎えられた祖靈は「義とされた靈」であり是をペルシア語では「ウラワーン」と言つた。此の風習は先ず中国に伝わりウラワーンが「盂蘭盆（うらぼん）」と表記された。更に形を変えた行事が仏教と共に日本にも改めて伝來したと思われる。

七月の「七夕」は、日本で古来から行われていた節句行事と中国の行事とが融合したものと言われるが、元は盂蘭盆などと一緒であつたらしい。現代は大空に「狂った國のミサイル」が飛ぶから牽牛織女は気を付けたほうが良い。

話は唐突に変わるが、向田邦子さんの短編「ねずみ花火」という作品があつた。やがて不慮の死を遂げる作者の靈感のような一篇で、今でも強く印象に残つてゐる。「お彼岸」も「お盆」も来るので冥界に祈りを捧げて拙文を閉じる。

長らくお待たせをしたが、ようやく此處から木曾義仲らが登場する場面に転換するので平家物語も少しスピードが上がることを御承知願いたい。

その頃、信濃国に「木曾冠者義仲（きそのかんじやよしなか）」と言う源氏が現れた：とする情報が都に伝えられた。頼朝と違つて全く無名の人物であつたから平家も当惑して「何者か？」と一斉に調査を始めたが誰も知らない。武士は二流でも三流でも場数を

廻文とは、平家打倒を呼び掛ける「触れ（決起案内状）」であり、長らくお待たせしたが、此処でようやく木曾義仲が出てくる。甘つたるい「源氏物語」とは違つて平家物語は武士の話であるから前章段までのように暇な天皇の恋愛話などは無くて良いのだが、どうする主張を展開する為には、事実か否かは別にして「平清盛に依る天皇家苛め」の話は必要であったと思われる。

さて、葵前と小督の話にあるように、平清盛は高倉天皇や回りの人々に対しても酷い仕打ちをしたことを、さすがに少し反省をしたようで高倉天皇の崩御などで氣落ちしている後白河法皇を慰めようと、安芸の國の巖島神社に仕える女性に産ませた自分の娘を法皇に献上？した。（娘は品物か！）

此の女性は原文に「優に華やかにおわしける」と書いてあるが年齢は十八歳であるから俗に「番茶も何とか」で、誰でもそこそこに見える。お供として

身分の高い者たちの子女が多く付けられた。迷惑な話である。その有り様は、まるで天皇の許に女御（第2皇后）が入内するような大掛かりなものであつたから、高倉上皇が亡くなられて未だ喪中なのに：と人々は密かに噂をしていた。

長らくお待たせをしたが、ようやく此處から木曾義仲らが登場する場面に転換するので平家物語も少しスピードが上がることを御承知願いたい。

【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

卷第六・（一・3）

廻文（めぐらしぶみ）のこと

踏んでいれば適當な官職を称するのだが、冠者と名乗るのは自分から「全くの新人です」と言つてゐることになる。平家の者たちも敵であることは間違いないから素性を確認したのだが平家一門のパソコンにデータは無かつた。

本人と周りの者が主張するところでは、源頼朝の父親である義朝の弟に帶刀先生義賢（たてわきせんじょうよしかた）という人物が居り、鳥羽上皇時代に東宮（皇子太子）の体仁親王（なりひとしんのう）後の近衛天皇）に仕えていた。帶刀先生とは刃物を持つた先生では無くて、東宮警護役の長である。退職してから領地のある関東に来ていたのだが其処で源氏一族の領地争いが起つた。源氏は平家と違つて一門を大事にしない。一族の争いを得意とするから身内同士でも真剣に戦う。

久寿二年（一一五五）に義賢は甥（頼朝の兄）の義平に討たれた。源氏なのに源氏に狙われたから義賢の遺児・義仲（いみち）は母親に抱かれて信濃国に逃れ、木曾の豪族・中原兼遠に匿された。

山奥に居ても中原氏は名族である。中原兼遠は、義仲に最後まで従つた樋口兼光、今井兼平、巴御前兄弟（妹）らの父親であり、義仲を主君として子供として二十余年育てた。後に富士川の合戦で平家軍に従つていた斎藤実盛や畠山重忠らも木曾義仲母子の庇護に密かに協力をしたようである。

成長した義仲は力も強く氣力も優れた武士となり人々は「比類なき強弓の射手、合戦の勇者、馬上で徒歩でも、古代の勇者として知られた坂上田村麻呂・藤原利仁（群盗鎮圧）・平維茂（平繁盛の孫）・平致頼（国香の末弟・良茂の孫）・藤原保昌（怪盗届伏）・源頼光（鬼退治伝説）・八幡太郎義家などに負けない武将」と噂していた。その義仲が有る時に父親代わりの中原兼遠

を呼んで次のように言つた。「聞く所に依ると、兵衛佐（ひょうえのすけ）（官職）頼朝が平家に反旗を翻して既に関東八か国を討ち従え、東海道から京の都に上り平氏軍を追い落とす勢いであると聞く。此の義仲も東山道（信濃・飛騨・美濃・近江）、北陸道（越中・加賀・越前）を従えて頼朝よりも早く平家軍を攻め落とし、都に於いて日本国一人の將軍と言われようと思うが、どうであろうか？」

義仲は、それとなく本心を述べたのだが、中原兼遠は心中大いに喜んで「それでこそ、是まで君を養育し奉つてきた甲斐が有ると言うのです。誠に八幡太郎義家公の子孫であればこそその御決意を嬉しく存じます」と答えた。こうして木曾義仲の平家打倒の心が確固としたものになつた。

やがて兼遠は義仲を伴つて都に上り、平家の者たちの様子を伺い、都の動静などを密かに探つていたのである。十三歳で元服をしたのも源氏ゆかりの石清水八幡宮であった。其の時に「我が四代の祖である源義家公は、此の神の子として八幡太郎と名乗られた。私も其れに見習う」と言つて、八幡宮で元服し「木曾次郎義仲」と名乗つた。

そういう事情を知らない平家は木曾義仲の挙兵に驚いたのであるが、中原兼遠は信州一円の武士に回覧板を回して決起の同志を集め禰の井小野太や海野行親などの同意を得てから徐々に勢力を広げていった。上野国では義仲の父・義賢に所縁のある多胡郡の武士が先ず味方に付いた。平家の盛りが過ぎた機会に、年来の源氏系の武士が芽を出す機会がようやく到来したのである。

（続く）

ふるさと風の会会員募集中!!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

編集事務局

〒315-0001

TEL 0299-24-2063
石岡市石岡13979-2
(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会 10+1年祭

ふれあいの里石岡・ひまわりの館 6月11日(日曜日)10時~17時

ふるさと風の会は、会報「ふるさと風」32号の刊行をもって、満11年となりました。ふるさと風の会11周年を記念して、ふれあいの里石岡・ひまわりの館にて、ふるさと風の会10+1年祭を開催いたします。記念祭では、月刊「ふるさと風」の活動実績としての「ふるさと風のバックナンバー展&文庫展」をはじめ、「ことば絵教室展」「御留川資料展」「劇団ことば座公演」「ふる里とは、物語の降る里をテーマとしたフリートーキング」を開催します。なお、ことば座公演は有料となります。



ふるさと風の会文庫の主な作品

- ・打田 昇三…歴史の嘘、私本平家物語、私本将門記他
- ・兼平智恵子…歴史のさといしおか散歩、ふるさと風のことば他
- ・伊東 弓子…風の景他
- ・小林 幸枝…風に舞う他
- ・菅原 茂美…遙かなる旅路（1、2）
- ・木村 進…地域に埋もれた歴史シリーズ、石岡地方のふるさと昔話、茨城のちょっと面白い昔話他
- ・白井 啓治…皇帝ペンギンの首飾り、霞ヶ浦の紅い鯨、朗読/ふるさと物語、隨筆/風に吹かれて他

ことば座・石岡発「常世の国の恋物語百」第37話

な(汝)は愛しきもの

(開演 14時30分 終演予定 16時) (観劇料 1500円)

○朗読手話舞「ふる里の風に舞う」 脚本・朗読:白井啓治 手話舞:小林幸枝 音楽(オカリナ):野口喜広

○野口喜広オカリナコンサート

○朗読劇「なは愛しきもの」 脚本・朗読:白井啓治 手話舞:小林幸枝 音楽(オカリナ):野口喜広

(製作:ふるさと風の会 製作担当:木下明男 背景画:兼平智恵子 装美:小林一男 ヘアメイク:庭山由美子)

な
汝
は
愛
しき
もの

名
も
な
い
花
は
あ
り
ま
せ
ん

あ
な
た
が
知
ら
な
い
だ
け
な
ど

名
も
な
い
花
の
愛
し
さ
を

私
が
知
ら
な
い
だ
け
な
ど

側
溝
に
しがみついて咲く小花

名は句と尋ねるむ心えのみえず

名もない草はありません

あなたが知らないだけなのです

名もない草の囁きを

私が聞けないだけなのです

大地に雑草といつ名の草はない

気がかれず踏みつけられて声忘れ

小林幸枝

白井啓治



野口喜広

ふるさと風の会 〒315-0001 茨城県石岡市石岡13979-2 (白井啓治 Tel 0299-24-2063)